

れで趣味のある宗教教育をしてやれば、それらの青年少年は必ず宗教的に育ち、その社會の改良家になるに違ひない、救世軍はその點に於て全然失敗である。ブリス大將五十年の苦心は倫敦の市では現れては居らない。ロンドンのデリー・メール紙の一九〇六年の統計によれば、確か救世軍は八千人の信者しか無くて、個人的に教養を中心として民主主義的の宗教教育を施して居る。コングリゲーション派には二萬七千人も貧民窟内に信者がある。つまり、その理由としては、救世軍は墮落したものを救ふに急しくて、豫防の準備をしないから、信者が残ら無いので、いつも信者の『あとすざり』計りで、進歩して行くことが無い。日本の救世軍などでも、貧民傳道はして居らぬが、そう云ふ傾向がないでもない。此點はよく研究して、日曜學校を盛にし、青年會に力を注ぐ可きであらうと思ふ。

貧民の犯罪 日本に於ける總ての犯罪の九割は貧民の犯罪であります。之を見ても日本で如何に貧民問題が大問題であるか、知れるのである。さて然らば貧民はどうしてそう多く犯罪を犯すかと云ふに、時によると、それが境遇の爲めであることがあり、貧民窟でそう養成された爲めであることがあり、又生理的、病理的にそうであることもある。

凶作の時や、不景氣の場合に、犯罪の多いのは境遇の爲めであることを明かに教へる。大正二

年の米高に東京市では一月より六月までに竊盜犯が前年度の七六五三件に加へて八〇八件激増したことがある。福岡縣の如きは二割方の増加で有つたと記憶して居る。

凶作飢饉の爲めに起る竊盜犯も同様の傾向を有して居る。然し面白いのは番頭が不正なことを行はなくなるのは妙なもので、それは不正なことを行へば行く處がなくなると云ふことを知つて居るからである。

貧民犯の七割は財産犯である。つまり、此種の犯罪は或程度まで境遇をよくしてやれば斷絶することの出来るものである。然し殘の三割である。之は所謂犯罪種族の行爲とでも言ふ可きもので、宗教の力でも、社會主義の力でも駄目なのに屬するものであらう。然し此方面の研究は専門家があるからその人達に御研究を御願して、私は日本特有の肉身犯であり、又貧困犯罪である、『貫子殺し』に就て一言せねばならぬ。貧民窟へ貫ひ兒の流入してゐることは澤山で有つて、大阪難波計りでも明治四十四年には三百八十四名あつたと云ふことである。そしてその半分以上はその年内に死亡すると云ふ。之は何を意味するであらうか？

私は毎年つゞけて貫子の葬式をよく出したことがある。その嬰兒は多く不義の胤に産れたものであるが、親も殺して貫ひたいので、貧民窟へ送り込むので、貫ひ方では、唯一時の附添金五圓

程が欲しくて、世話するので、勿論育てる氣は決して無い。だから出来るだけ早く殺すのである。その最も極端な例は十數年前彼の有名な大阪南區日本橋の四百幾十人を貫ひ殺した老婆である。然し貧民窟内には此老婆の様なもの幾十人幾百人とある。私は之を日本の貧民の特種犯罪に數へても善いと思ふて居る。之は日本の極く悪い家族制度の産んだ恐ろしい副産物であらうと思ふ。貧民と群衆心理 貧民が衆合性を持つて居ることは實に著しい事實である。今日の特殊部落の如きがその適例である。然し近世の産業文明には更に特別の意味が加つて、貧民の群衆を強めたそれは工場的組織と、その都市文明の爲めである。處が群衆生活と云ふものは貧民には餘程都合の善いものではあるが、趣味の低下することに於ては、此群衆性程恐ろしいものは無い。だから、貧民は貧民窟を組織し、貧民窟は今日多くの犯罪者を養成する様になつて居るのである。所が近世文明は貧民にも選舉權を與へる傾向を持つて居るから、實に危険であると考へる人もある（ミカヘルスの如き）、然しそれは別に心配せなくとも教育さへ與へれば、此趣味の低下は防止することが出来ると思は考へて居る。

ストライキの問題 貧民心理から云へばストライキは好景氣のパロメイトルとでも云ふ可きで、ストライキの多い程景氣が善いので、不景氣であれば、ストライキしてくれよと頼んでも多分す

るものはあるまい。日本でも近頃ストライキが頓に増加して大正六年に三百九十七件有つたとかで、明治三十年より四十四年まで十五年間に僅か三百二件しか無かつたのに比較すると、*レ、コ、ロ、ド*破りであるが、之は教育程度の普及を示す善い現象であると共に、好景氣の表象である。心配は無い、日本の勞働者の如き團結心なきものは、不景氣の襲來と共にストライキする勇氣も無くなるものである。然し國家の産業政策としては、一日も早く同盟罷工を一種の犯罪行爲視する警察處罰令を撤廢して、今日低下しつゝある、日本全國の死亡率を回復するだけの元氣を職工社會につけてやらねばならぬ。

最近貧民心理學の傾向 私しは三年足らずアメリカに居たが、あの心理學の盛んな米國に入十五六の實驗室はあるが、誰一人貧民心理の様な問題を研究して居らぬに少々驚いた、プリンストンの實驗心理教室のマコミック博士は『宗派の心理』など書いて居るが私が『貧民心理』を書くと云ふと『そんな心理學が可能か?』と返問せられて居た。之は一昨年夏の夏のことである。プリンストンでは全米國の心理實驗室で發表する論文のカタログが全部發表されて居るが、私は注意してそのカタログを繰つたが、遂に失望した、貧民心理學は全く新しい領域で實は未だ私の様な冒險的無謀者が侵入する區域でないらしい、全體に米國のチチナリの様な實驗心理學派は、出來

るだけ科學的である爲めに、私等が冒險する様な地域に踏み出すことを好まぬものらしい、變體心理學派はいやがる傾向がある。私は不幸にしてブリントンの心理實驗室の外出なかつたものだから、他の實驗室の様子は知る機会が無かつた、それに反して米國に於ける社會心理學はどうかと云へば、之は貧民問題には遠いもので、ハンターやデヴィンが先づ貧民問題の權威となつて居るが、彼等は全く心理的方面を没却して居るから少しも話が合はぬ、そこで米國三年の留學は貧民心理の研究には何の得る所が無かつたのである。然し米國に於ける實驗心理の進歩は帝大の松本博士が研究に出かけられる位であつて、その應用的能力は實に著しいものだから、近い中にその應用力を貧民心理に及ぼしてくるのは今から保證して置いても善い。貧民心理學は實驗心理學と、社會心理學は實驗心理學と經濟學の三つが揃はねばならぬのだから、一寸手をつけることが困難でもあるが、米國では必ず出來ると私は信じて居る。

私は『貧民心理』を初めて書いたものとして、その『科學が可能なりや』と問はれた場合に『然り』と答ふるに少しも躊躇しない。殊に輓近精神分析學などが進歩して來たので、一層貧困から來る精神状態の分析が可能になつて來た。最近に於て實驗心理の方面から貧民心理に貢献してゐたのは、ハアヴァド大學教授カノン氏の『飢餓の心理』である。彼は飢餓の心理が食物と全く

關係の無いことを實驗的に表示した。精神分析の方からは、獨逸の職工の疾病、負傷等の勞働保險金の欲求から來るヒステリ現象などが面白い題目になつて居る。能率増進の方面から職工心理の研究は漸く緒につきつゝあるが、まだどうも眞の面白い部分に突込んで居らぬらしく私は思ふ、私がもしこの後手をつけるならば職工心理であると思ふ。職工が熟練の域に這入ると數の觀念などが、理性の部分を通り越して本能的になつてくるのが實に面白い研究題目である。その外紫外線が見え出したり、感覺が投影して器械が身體の一部分の様になることなどは面白い部分である。營養不良と學業成績の相關係數は明白に表示されたから、貧民兒童には食物を公給することにしたのは英國政府、米國費府その他處々あるが、之なども、貧民心理の上の進歩であると思へば進歩である。其外、不潔と嬰兒死亡率の關係は一九一〇年及び一九一六年の米國勞働省兒童局の研究でわかつたが、貧民が不潔にする心理そのもの、研究は未だ誰も手をつけて居らない、その他貧民の移動率に就てはシカゴ市で漸く近頃研究し始めたが、仲々一寸全部終了するには年がかゝることであらう。然し日本の貧民は歴史的に長い過去を持つて居るから、新しい國で見られぬ社會的遺傳を持つて居る。で、『貧民人格』などを研究するには實に面白いフィールドを與へてくれる。英國のバイオメトリシヤンのピアソン一派は極端に『貧困が遺傳する』と統計的結論を

労働者の心理

與へんとして居るが、さて之がどれだけ真かと云へば、頗る覺束ないものであらう、貧民心理は矢張未開地である。

労働者の知覚と本能

手 労働者には、労働者特有の知覚が発達するもので有つて、仕上職工や旋盤工は一ミリの幾百分の一は愚か、一吋の千分の一位までも、その技術によつて仕上げ得るものである。之は手の知覚からであるが、煙草製造所の女工が、一握りでいくつのシガレットを握つて居るかを知り、隣寸會社の女工が、一個のマツチ箱に這入る軸の數をよく知つて居るなどは熟練とは云へ全く、數の觀念が本能化したものと云はねばならぬ。

タイプライターの技術は全く頭と手の連鎖であるが、上手なものになると、タイプライターで口授を筆記する位のことは何でもないものである。數讀みから云へば印刷會社で、紙を勘定するに五本の指を五枚づゝにつき込んで恐ろしく早く正確に讀み了へる技術が有つて、紙數を讀む計りで食うて居るものもある。活版屋で、植字工がABCの活字を手の位置で尋ねあて、ルビを全く手の筋肉運動の位置で箱からひきぬくなどは、とても想像にあまることで、その爲めに、能率上の位置が、ちやんと職工の頭の中に出て居るのなどは實に面白いことであると云はねばならぬ。ブラシユの植毛工が一穴にどれ位の毛が這入るかを、指元で獸毛をつかんで見てよく知つ

て居る如きは殆ど驚く可きで有つて、我等から見れば奇蹟の様なものである。實驗心理に筋肉の自動的運動と云ふものがあるが、之等の奇蹟的筋肉運動や、觸覺運動は皆このアウトマツク・ムーブメントの完成したものである。

舌 舌も職工には必要な知覺器官で有つて、ブラシユの植毛の如きは、舌の鋭敏な知覺によつて、指先で充分區分が出来ない獸毛の數を判明する。舌の判別は正確なもので有つて、決して間違はない。

眼 眼は大事な知覺器官である、之は何噸あるとか、之は何寸あるとか、尺度より職工の眼は遙かに正確なことが多い。鑄工が、鐵の色によつて、その善悪を云ひ、鎔鑪の焰によつて、鐵がどれ位の程度の硬度を以つて出てくるとか、或はこの色であれば、竈は何度であるとか、我々素人には見え無い、光線——紫外線までが見え出すのは、不思議と云へば、不思議である。またその代り、職業上の犠牲として視力を失つて居るものも少なくない。ガラス職工の白障眼、熔解鑪職工の遠視がそれである。労働者の眼はこの様に局部的に發達して居るが、全體から見れば一方に偏するものであることは免るまい。即ち、シユンステルベルヒが實驗した、労働者と大學生の電車々掌事故は、労働者が大學生に比較して約十倍事故が多いと報告されて居る。之は全く眼

が、大學生の如く鋭敏に活動しないからであらう。知ることは一種の意志である。と之からも決論出来るが、労働者の感覺は局部的、本能的に發達するものだから、大學生の様に全人格の統合生活よりの活動がどうしても鈍くなる。それで、労働者に常に一般高等教育を施さなければ、能率は下るものである。

之は、私自身が、自分の經營して居たブラシユ工場で實驗した事であるが、高等教育を受けて來たもの程、(年齢が二十歳以上で無ければ)植毛の能率が初めから高く、熟練の速度も遙に高い、尋常と高等小學校卒業生の植毛の熟練速度の分率は、或者では百パーセントから三十三パーセント位まで違つた。即ち、教育は一種の知覺能率を増進せしむるものであることは、之によつても善く證明されたが、之は作業派心理學が實驗的に教へる所のもので有つて、實驗室の結果と労働市場の報告とは少しも違つて居らないことを證明するものである。

眼と云ふものは、妙なもので、米の撰別、生絲の撰別の如き、とても一ヶ月や、二ヶ月では覚え込め無いが、やつて居ると、段々上手になつて來て、之は肥後米だ、何米だとよくわかる様になる。生絲や、獸毛の撰別、獸骨の木の地の撰別などが、實に不思議な程、眼の熟練によるものである。或職工は、角ボタンを見て、之は、日本牛の角から、之は青島、之は濠洲、之は米國、之

は英國と云ふ風に、其國の風土が、牛の角の細胞に與へた變化から、その産地を判別するものである。

お可笑なもので、平常氣をつけて居らないものが、その方面に注意してくると、驚く可き發達があるもので、屑物拾ひまたは、屑物撰別工が、我等の氣のつかぬものを拾ひ集めるのも不思議と云ふ可き程である。漁夫は、一里も沖に魚群が遊びで來るのが善く見えるが、機械職工は火花によつて、善く金屬の性質を區別する位のことは何でもない。又鐵の色によつて、硬度を區別したり、回轉速度によつて、刃物の角度を按配したり、それはとても、一年や二年で考へつか無い本能的祕密が、眼を通して、自分にも氣のつかぬ或物を握るものである。殊に、各種の刃のつけ方などときては、全く骨であるが、その骨も、長年の熟練の結果、本能で調整して得べきものであるからなか／＼六ヶ敷いものである。

耳 職工であれば、音によつて、自分の機械に何かの故障があるかないか位のことはよく判別をする。また、回轉度数は眼でも知るが、音でも知る。然し工場内の雑音は、發音を非常に害するものと見えて、活版工などは音律を充分守れ無いものが多い、殊に機械工場で之が甚しい。

本能の機械に對する投影

勞働心理の中で最も面白い部分は、使ひ慣れた器具、機械が職工の身體の一部分の様に投影してしまふことである。火藥製造者は、木片で火藥を乾燥させて居た、木片が指先から手先の様に感じて來て、乾燥の程度が善くわかり、ブラシ職工などでも、エズリの職人などが、機械を工場から工場へ持ち歩くなどは、その機械の習性と自分のリズムや本能が善く一致して來るから離れられぬものらしい。紡績の女工などで他人の機械を代理に使用することを非常に否がると云ふことを小山の富山紡績で聞いたが、之なども、機械と、女工が一つになつて居るので、本能が機械に投影して居るものだからその一つの機械であればどんな場合にどんなことが起ると云ふことは善くわかるが、その他であれば、機械に就て落付くまでは數日を要するのである。

この本能の機械投影の勝れたものは、新機械の發明となつて現るもので有つて、機械が呑込まれると、機械が成長する様になる。之がもしも、本能化しなくて、機械化すると、成長即ち發明と云ふものはないが、機械が、本能化するものだから、本物の様に成長して、筋肉の様に云ふことをさく様になる。之が、職工仲間に發明が多い理由である。ワットの發明にしても、各種の紡

績機械にしても、織物機械にしても職工の中に反つて、有用な發明をするものが多い。一昨年米國で問題になつて居た人物は、計算なしに、製圖すると云ふ青年に就てゝ有つたが、その男が本能的に、無計算で、製圖する方が、數學で割出した方より正確で有ると云ふので有つた。ベルグソンは、蟻や蜂の本能の方が、人間の知識よりも立派な働きをして居ると云はれて居るが、人間の創造生活には、矢張り、蟻や、蜂の程度の本能的作業の餘程多く行はれて居るもので有つて、たゞ我等が今日自覺して居らぬだけである。エチソンやテルザの發明には本能的發明心が彼の機械に對する適應と一所になつた處に現れたもので、宇宙に於ける本能インストinktの流れより遠く離れて居るものでは無い。

労働者の食慾及味覺の變化

私は今迄に主として、作業上の心理に就て述べたが、労働者の個性の知覺として、食慾や、味覺の變化の著しいことに特別に注意せねばならぬ。労働者でも、力仕事をするものは熱のカロリーを多く消費する爲めに、著しく多くの食物を取る必要がある、自然大食となり、肉食を要求する。普通の人が一、二千カロリー位ですむ所を石炭仲仕の如きであれば、三千五百カロリーから、四千カロリー

も入用である。それで、彼等の下宿屋は、兵庫神戸でも一日分食費七十五錢を取つて居る。彼等の一升飯は我等には理解は出来ぬが、カロリーの消費關係上、之が心理的に食慾として現れるから面白いものである。又更に、このカロリを直に補はねばならぬと云ふ生理的要求上油物、肝油、膽の油揚げ等を貧民窟で多く買つて食うて居る。之は普通人が、貧民窟に何故てんや(店屋)がこんなにかと驚く理由であるが、之は彼等の生理的・心理的要求から來て居るので有つて、之なくしては、彼等はやつて行けないのである。馬力の人足などは、夏になると精をつけるためだと云つて、生豆腐をそのまゝ、掴み食ひして、之で眼が見える様になつたと云ふが、生豆腐が、人足のカロリー回復力の速度を早めることは著しいものと見えて、彼等は之を嗜好品以上、藥の様に云うて居る。

熱の仕事をするものが、鹽を嘗めるのも生理的要求からの心理作用で有つて、發汗すると鹽分が足らなくなるので——汗はクロールナトリウムを皮膚の上層に結晶して残す——その補ひを早くつけなくてはならぬから、鹽を多量に取る。彼等が、鹽辛い汁を好むのはその理由であるが、それ計りなしに、彼等は生鹽を一週間に五十乃至五百グラム位嘗めることは平常のことである。角力取が、鹽嘗めるのも、馬に鹽を與へるのも、生理的に云へば同じことである。たゞ後者は、

生理的要求が、心理的に來て居るだけに、今日までその理由を知らずになく習慣の様に見慣されて居るのは労働者の心理研究が今日猶進歩して居らぬ證據である。この特殊な食慾と味覺のあることは、食物と味覺によつて階級を造る所以であつて、上等料理の様な鹽分の少ない、脂肪の少ないものは、労働者の食物としては、實に不適當なもので有つて、公設食堂の經營者などが、大に注意すべき要點である。

労働者は麥飯を食はぬ迷信がある。然し之にも一つの心理があるので、彼等は消化の速度即ち元氣回復の速度を重ずる所から、麥飯の不消化なものよりか、米飯を撰ぶものらしく又、麥飯を食うて居てはとても激烈な労働に堪へられぬと云うて居る。彼等は餅をよく食ふが、之なども熱カロリ補充の爲めに必要なものらしい。麥で餅が出来る時代が来るまで、日本の労働者は米食に執着するであらう外米を忌むのはまた同様の理由で、外米だと腹が減つて仕方が無いと云ふ。之も外米の與へるカロリが日本米に比較して、多く無い爲めらしい。それで、日本の労働者を日本米より引離すには、廉價な鯨肉とか、豚肉を多く與へるより外に仕方が無いと思ふ。それで無ければ麥を早く消化の出來て、一度にカロリを多く與へ得る様に製造するにある。

労働者飲酒の心理と刺激の問題

労働者飲酒の心理も、疲労回復の速度に關係して居る。彼等は牛馬に等しい労働をする。それで、恐ろしく疲労する。その苦痛を(1)熱量で早く回復したい爲めと(2)強烈な刺激を得て晝間の苦痛を慰藉したいのが一つ(3)飲酒より來る價値の覆倒、忘却等を味ふ爲め(4)又熟睡が出來て、疲労回復の速度が早いのが第四の理由である。それで、今日の様な亂暴な労働組織の與へられた世界で、毒であるとは知り乍らも、酒を呑まなければ、發狂する位の性質の過激な労働に従事して居るものは、幾千萬人あるかも知れ無い。之はグレゴリーと云ふ米國の精神醫學界の泰斗が注意して居る様に、實に近世文明の大問題で有つて、もし、禁酒を國家的にするならば、我等はそれに対する社會的の刺激を彼等に與へる必要があり、それで無ければ八時間労働制を採用して、労働を安易にし、熱カロリを迅速に與へる必要があると思ふ。

そこで近世都市の刺激の問題に移る。彼等は禁酒せられると、メチオール・アルコールを飲んだり、コカイン、モルヒネ、エーテル等を使用する様になつて、國民體質を恐ろしく墮落さすものである。チャルス・バスカーヴィル Charles Baskerville は一九一七年の秋紐育で動員の結果、禁酒命令

が出た爲めに起つた、メチール・アルコール使用者七百二十五人に就て報告して居る。彼等は、Jamaica Ginger, Columbia spirits, Ginger Essence, Whiskey, Sherry, Essence of Peppermint, Essence of Lemon Extract, Essence of Cinnamon, Bay Rum, Bitters, Florida water, Cider Rum, Syrup 等にメチール・アルコールを混和して飲むのである。その結果、四百十三人は中毒の爲死亡し、八十二人は盲目となり、五十六人は回復したが、百二十八人は部分的にのみ回復し、七百二十五人の中四十六人の結果の判明しないものもあるが、何にしても酒の代用として強烈な刺激を要求することは之で充分證明せられるが、禁酒は人種改良上の大問題であると共に今日の労働階級に取つては必須の日用品となつて居るのは、全くその効用あるが爲めで、もし飲酒を止めさそうと思へばどうしても之に代るべき何かの代用品を提供する必要がある有名な犯罪學者ロンブローは、演劇音楽などを勧めて居るが活動寫真なども酒舖を閉鎖せしめ得る程効能のあるものである。善い演劇は飲酒を半減する効能があるとロンブローは云うて居る。此方面は、労働者を直接取扱ふ人々が是非考へ無くてはならぬ點だと思ふ。

労働者の性慾に就て

強烈な刺激を要求するのと、生理界に於ける弱者は常に多くの子を産まねばならぬと云ふ運命に支配せられて、労働者の色慾はどうしても不健全な程強烈になる。ドクトル島村育人氏は大阪市の貧民に就て研究した結果、労働者の妻は平均九人の子供を産んで居るさうである。之を北米女子大學の卒業生の平均一人にも足らぬ出産率と比較すると、非常な差である。北米のハウヅアト大學の卒業生なども最近三十五年間に子を産むことが半減したことが報告せられて居るが、近代生活に於て學問や高等生活の爲めに、性慾生活に一大變動が來たことは争ふ可らざる事實で、米國などでも労働者の娘は早く結婚し、多く子を産むと云ふことを統計的に、ジョン・マルチンが報告して居る。和蘭政府などは、労働者の家庭に多く子が産れて、貧困の度が甚しくなるのを恐れて、新マルサスの墮胎や、避妊法を労働階級に勧めて、可成善き成績を収めて居る。この病的性慾は纏て、マホイズムやサイエチズムや、フエチシエ病が労働者階級に多いことになるのであるが、之に關しては拙著『貧民心理の研究』に就て見られんことを希望する。

労働者の注意の心理と災害の關係

(1) 過勞と(2) 營養不良と(3) 飲酒と(4) 性慾強烈と(5) 睡眠不足の爲めに、どれだけ労働者の注意が集

注し得ないものであるかは殆んど驚く可き位である。英國軍需品製造委員の研究の結果エツチ・ダブルユー・フェルノン氏の報告する所によると、ヒューズを製造する工場の約五萬人に就て研究した處が、一日十時間労働するのと、十二時間労働するのとで女工の災害率は二百五十パーセント多くなるさうである。即ち僅か二時間の差で、疲労の結果、災害が増加するのである。災害の時間を調べて見ても同様なことが云ひ得るので有つて、疲労の甚だしい朝の十一時から十二時頃が最も多く負傷し、午後は四時前後が、最も多く負傷するのである。之はその前後に疲労が甚しいからである。土曜日の負傷の多いのもその爲めである。で、工場に災害を少なくせんとするならば、労働者に充分の安息を與へねばならぬ。注意が集中すれば生産率は上る。それで、夜間の方が生産率が高いとは、英國軍需品局の労働者の能率を研究したフェルノン氏の報告である。で、能率を増進せしめる爲めに、フェルノン氏は、作業中若し労働者が反對しなければ口に嚙をはめ、目隠を施し耳に栓をするならば注意が集中して成績が上るであらうとのことである。又注意を集中させる爲めに、機械を一つ一つ隔離するならば善からうとのことである。

英國の有名なコドウエル菓子會社では、能率の上らぬ子供を研究して見ると、それは全く營養不良、發育不完全な子供に多いと云ふことがわかつた。此點まで行けば教育心理も作業心理も同

一のものである。

酒飲及睡眠の不足は能率の上に大影響を與へるのみならず災害を多くして、健康を害せしめる。それで、夜業を連続することは能率から云うても、保健から云うても一大問題である。鐵道事故の如きは、多く、車掌、運轉手、ポイントマンの睡眠不足と飲酒から來るものである。

労働者の知識の問題

労働者には特種な感覺があり、本能があることは既に説明した通りであるが、労働者の知識は、その本能と知覺に従つて、特種な方面に發達するものである。然し近世的分業化の餘弊を受けてそれが偏して居るものであることは已むを得ない。少さい時に發展の見込のあるものでも労働階級に陥ちて本能的作業本位の生活を多く送ると、知識的欲望が少くなつたり、現狀維持で満足する傾向が出来る。それは、疲労の程度が甚しいので『面倒臭い』と云ふ心理が生れるからである。貧民の兒童が早熟で、老衰することの早いのは、矢張り同じことで、こいつは豪くなると思つて居ると、十七、十八頃で發育が止り、それと共に、貧民階級に満足して居る様なものになるのである。で、私の意見では、成長の時期の長いもの程、知識的に發達の多いもので、労働者の

子供の様に、十歳になるや、ならずで、父の職業と同一のことをやるのは、七十歳になつても別に知識的發明も進歩も無くして止まるものである。それで矢張り學校教育を施す必要がある。學校教育は勞働能率を上げる上に於て大に効能があることは既に述べた通りであるが、此處で一層詳細に説明すると、Karl T. Vaughnが、北米の或大學生に就て研究したことによると、次の様な面白い係数が報告せられて居る。即ち、學校教育は、知識の内容を増加せしむる計りでなしに、脳髓そのものの結構を改造するものであると云ふ決論になるのである。即ち次の通である。

	一年生の能率	四年生の能率
注意集中	八〇・一%	八四・一%
學習速度	六八・一%	七一・四%
日加速度	一三・三%	一四八・三%
聯想速度	四五・八%	四六・八%
觀察の配置	二三・五%	三四・一%
級別腦力係數	四七一・〇%	五六八・〇%

更に進級すると共に腦力がどれだけ進むかと云ふのを示して居るが、それは、次に示す通りである。

聯想速度と級別	五四%
---------	-----

知慧と學習速度	五一%
觀察の配置	四七%
おちつきと級別	四三%
觀察の配置と聯想速度	三二%
學習速度と級別	二四%
おちつきと知慧	二二%
おちつきと觀察配置	二〇%

之は實驗心理的に研究したものであるが、以上の決論によつて、私は、勞働階級にも高等教育を興へる必要があるのみならず、職工學校、徒弟學校、勞働大學等を大に起し、勞働階級の腦髓を根本的改造する必要があると思ふのである。白痴でも教育して居ると、他の腦力が出てくるが、況んや勞働者に於てをやだ。『勞働者は無智だ』と資本階級の人々は一概に云うて了ふが、それは無理な決論で、彼等は教育を受け得なかつたから無智なので、無智だから勞働者になつて居るので無智なのである。勿論之に例外もある。然し、今日の日本などで、無智だから勞働者になつて居るなどと考へるのは非常な間違で、教育を受けさへすれば、腦は自然出來ると云うても善いと思ふ。然し茲に斷つて置かねばならぬことは飲酒、花柳病等の結果、勞働者の子孫はどうし

ても體質的に退化して行く傾向があることは否むことが出来ぬ。それで、技術に於ても不熟練労働者が増加し、ロンドンの様な貧民窟が産業革命の結果出来上るのである。で、シユモラーは一七五〇——一八五〇年の間に、歐洲に於ける貧民階級が出来上つと云ふて居るが、全く上に述べた様な意味である。然し日本ではまだその時期に達して居らぬのであるが、もしも労働者の生活を根本的に改善するで無ければ教育も何者も多く救済することの出来ぬ惨憺たるものになるかも知れぬ。

労働者の感情と意志

昔から日本でも職業に就て、各々違つた歌謡があるか、労働者には、労働者特有のリズムがあるものである。攝津灘の『百日』と稱する酒造人夫は米を磨ぐのに、面白い歌を唱ふ。そしてそのリズムによつて時間を計り、何回歌つたから之れで善く磨げて居るとか居らぬとか判明をする。杭を打つ女労働者には、一つ引き二つ引きの區別によつて繩を引くリズムを區別する爲めに、特別の歌を唱ふ。

筒井清山か、野狐三次か

ヨインヤン！ ヤレエ！

江戸で高尾か、小紫！

ヨインヤン！ ヤレエ！

と云ふのが二つ引きのリズムのある歌で、

アーエー

お醫者さんでも 有馬の湯でも

戀の病はなほりやせぬ

と云ふのが一つ引きのリズムのある歌である。

鳶職のリズムは軽いものであらねばならぬから、それ相當の短い歌がある。昔の鐘鐻には音頭が必要で有つて、リズムが揃はねば、金が溶け無いものだから、色々なものが出来た。マッチ工場マッチ工場の雑音の中で唱ふものと、紡績會社で唱ふものは、自からリズムが違ふ。マッチ工場では馬鹿に長く引張る。そして、機械の音が伴奏をする。

凡て筋肉労働は感情さへ昂奮して居ればアクトマツク、ハイアメント自働運動は何でも無いものだから、歌謡によつて、働勞の苦痛を忘れる様が出来て居る。それで、今日の日本労働界の急務は、職業によつての新しいリズムの歌謡を得ることである。

歌は工場を統一するに最も簡便な近道なのである。今日の日本の工場経営者の様に歌謠に不注意であることは非常な能率上の損失である。

リズムが機械の運轉度數と合はぬと、職工が負傷する。又廻轉度數の高いものを取扱ふと非常な神經衰弱にかゝる。日本の紡績會社でも、十六七歳から二十二三まで働いてくれたら、その後は働いて貰は無くとも善いと云ふて居るが、米國の女工同盟會では今日の様な廻轉速度の高い紡錘では二十五歳以後殆ど失神した様な精神状態で會社を抛り出される恐れがあると決議をして居る。

日本の労働組織は多少封建制度的である爲めに、伍長と平職工との感情の衝突、組と組との衝突などは絶えずある。知識の方に延び上らないものはよく感情で凡てのことを解決するものであるが、日本では凡ての労働組織を感情でやつて居る様だ。佛國でも十八世紀末に有つた一種の労働組合の *Compagnons* には一種の階級が有つて、リボンを高くつけるものと低くつけるもので等差が有つたが、之れが爲めに喧嘩したのも少なく無かつたと云ふ (Levine, *Syndicalism in France* p. 119) 日本でも昔はよく消防夫の仲間喧嘩したもので江戸の『め組』の喧嘩の如きは有名なものである。今日でも労働者間にはよく喧嘩がある。(拙著『貧民心理の研究』喧嘩の研究参照)

ストライキと労働者の感情の関係

日本の多くのストライキがまだ感情本位である。それは日本の労働者がまだ經濟的に訓練されて居らぬからである。大正七年八月十二日の神戸三菱造船所の暴動の如き、全く感情の勃發である。會社は漢文混りの賃銀制度の改革を廣告した、労働者はそれが讀めぬから八千人が暴動を始めた。そして暴動が飛び出して、鈴木商店が焼かれた。

米國のストライキでも、感情が多く手傳つて居ると云ふのが、米國労働省統計局のスタチュワート Ethelbert Stewart 氏の意見である。もう調訂が出来て居る點になつて、労働者側又は、資本家側に變な感情的な人が居る爲めに、どうしても一致してやらうと云はないのである。それでストライキが起ると、彼は幾百のストライキを調訂した經驗上述べて居る。(ニューヨーク・タイムズ一九一六年八月六日参照)

米國では労働側にも資本家側にもゴロツキを雇入れてストライキの爲めに備へまた働らかすことになつて居るが、彼等はガンナー Gunner と稱せられて、一昨年など多くのものが此の爲めに檢舉された事がある。之れなどは極端に労働者のストライキに對する感情上の缺點を告白して居

るもので、我日本に於てもこんなことが無い様に大に注意せねばならぬ。

『面倒臭がり』の心理

労働者の中に、家を穢なくして少しも掃除しないものがある。あれは面倒臭いからで、工場などでも、少し注意すれば奇麗にやれるものを、面倒臭がるのは、全く疲勞と執意の關係が有つて、労働者の筋肉と脳髓は、一本道しか動かぬもので、違つた仕事に移るには、新しい注意と勢力が入るがその勢力が出て來ない場合には面倒臭がつて、決して仕事をしない怠惰であると云ふのではない。然し面倒臭いのである。それで、この『面倒臭い』心理から、機械の掃除を怠り、會社にも損害をかけ、自分も負傷する様なことは決して珍らしくない。面倒臭がるものは、病身なものも睡眠不足のもの、營養不良のもの、心臓の悪いもの、身持ちの悪いもの、幼時病身であつたもの、生意氣で心理的に障害のあるものに之が多い。神戸に悪い郵便脚夫が有つて、端書や手紙を一々配達するのが面倒臭いものだから、幾千となしに溝の中へ捨てたものが有つた。病身なものにはこんなことがあり勝である。労働者の中で、顔も手も洗はず晝飯を食ふものは過半以上である。それは面倒臭いからで、工場歸りに油を顔につけて居るものは多く面倒臭がりの連中である。過勞

の労働者は面倒臭がりの連中ばかりだから、工場内は穢くなり、便所は不穢となり、それは手がつけられぬ程衰れな状態を呈するものである。此點は工場經營者がよく氣を配つて、凡て簡便に物事が運べる様にして置く必要がある。

労働者移動の心理

労働者は金を見て移るものである。また生活の安定を求めて移る。故に熟練職工には移動率が少なく、不熟練職工に移動率が高い。従つて景氣の善い時には移動が多くて、不景氣の時には移動が少ない。米國の實業家ウクトン・スリンググラフ氏が『イースタン・アンダライター』誌に寄稿した所によると、米國では、戦争前には、労働者の移動は年平均一割で有つたものださうだが、彼が、ナショナル・シユワチ會社 National Surety の一九一七年六月一日より十二月一日までの移動率に就て研究した處によるとその間の移動率は十五割になつて居る。同會社の鐵道部に關係して居るものは、戦争前は一年に二割で有つたものが、今日では三千の職工に對して四千二百回の出入があるとのことである。之は熟練したものが召集されたから起るので、不熟練労働者はどうしてもこの様な高い移動率が現れてくる。日本に於ても炭坑などは多く不熟練労働者を使

用して居るが、政府の炭坑の様な坑夫の待遇の非常に善い所で一年十三割半を示して居る。(九州福岡縣二瀬坑)之が足尾銅山などになると、一年に驚く可き程移動率が高くなるものである。(拙著「貧民心理の研究」職工移動率参照)

労働者の境遇と人格

労働者の多くが今日は賃銀生活で満足せねばならぬだけ、生活に餘裕が無く不安であることは争ふことの出来ない事實で有つて、日本の九割の犯罪が、多く労働者階級の貧しいものから出るのは、この間の消息を告げるものである。米國労働省兒童局ミス・ランズロップの研究によると、一週十弗の収入ある労働者の家庭と、一週二十五弗の収入ある家庭とでは、嬰兒の死亡率が二倍違ふさうで、十弗しか取らぬ家庭は結局二倍多く子供を殺すのである。即ち賃銀の程度により、生活が不安になるばかりでなく、生存それ自身までも脅かされるかゝわかるが、此生活不安の程度が甚しくなると聽ては米騒動となり、暴動となるのである。どの革命でも、労働者が一番の暴れ大将であるのは、平常からの生活不安で抑壓せられた意志や感情が一度に突發するからである。生物の下等なもの程境遇に支配を受けることが甚しいが、人間社會に於ても労働者程、境遇

の支配を受けるものは少ない。第一彼等はその服装に感化を受ける。有名な米國の小説家ロンドンの倫敦貧民窟の探見書の中に、如何に彼が、オヴァオール(職工服)を着ると、世界が激變したかの様に見えたかを面白く書いて居る。私も印絆纏で善く歩いて見たが違ふ、違ふ、世界が全く違ふ。私は電車の中でも、道の上でも反抗的の氣分に充されて困つた。實際シャツに腹掛だけである、どこで寝轉んでも大丈夫なものだから、ウンと亂暴がしたい様な氣になるし、社會も彼は労働者だからと許してくれる様に思ふ。食物のことに就ては先にも述べたが、長い羽織を着て、立つて蕎麥などを食ふ勇氣もあまり起らぬが、印絆纏だとそれが平氣でやれる。住宅の感化だつてさうである。九尺二間の長屋に住んで居ると大きな門の前に立つと自然と反抗的になる。殊に地下室などになると、頹廢的氣分が甚しくなつて、アンドレ・ゾフが『地下室』に書いて居る凄氣分になる。

木賃宿の墮落は甚しいものである。それで、英國などでは十三歳以下の兒童を木賃宿に宿泊せしめることを禁止して居る。土方稼業の労働者の間にも古くから仲間に憲法が有つて木賃宿に泊ることは禁止して居る。

若の生活は不安に満ちて居るから、彼等は迷信的になり、生命を輕視する様な傾きが出来

る。職業に従つて、一種の疾病もあるので、ゴム會社などへ行くものは、揮發油中毒やゴム病と稱する炭化二硫化物中毒にやられて、いつも頭痛がして、憂鬱であり、厭世的に傾く。私は今のまゝで日本の労働者がどれだけ持ちこたへて行けるかを疑問にして居る。私は『貧民心理の研究』の最後の句に暴動の起るべきことを豫言して置いた處、大正七年八月の暴動が有つて、不幸にして私の豫言が的中したが、私はあの暴動が有つた日から、一層憂鬱になつた。日本の社會は根本的に社會問題を解決せやうとはせずに、資本家に依頼して、廉賣的な編織策をのみ講じた。然し社會はその後一層惡化しつゝある。物價の騰貴——殊に穀物の騰貴は到底下層労働者の堪へ得る所ではない。私は斷言する。近い中に必ずまた何か不祥事が起るから、今日の日本の學者も中産者も、下層の事情に暗いので泰平無事を祝うて居るが、私は來る可き數年に、日本の凡ての運命が定まると思つて居る。

不景氣時代の労働者の心理

ストライキはこの後日本では少なくなる。不景氣の時にはストライキは無い。好景氣に多くなる。然しストライキが出來なくなると労働者は皆犯罪的傾向を帯びる。それで私は日本に犯罪が

激増すべきを豫言する。その犯罪も肉身犯で有つて、殺人、傷害が激増する。不景氣になると、離婚が増加し乳兒死亡率が増加し、密娼が増加し、浮浪徒が増す。日本は最近著しく自殺が減退したが、私は豫言することが出来る。また、東京大阪の自殺率が激増するであらう。日本の今日の生活不安は労働階級に重過ぎる。内務省や逓信省では、労働者に貯金を勧めて居るが、それは一昨年末から昨年夏までに勧めるべきで有つた。今日では物價の騰貴と、貨銀の騰貴が相並行しなから、彼等は貯金をする餘裕を持つて居らぬ。

職業と性格

労働者でも、職業によつて、性格が違つてくる。鐵工は氣が荒く、殊に、製鐵の如き造船所などでも最も氣が荒いものとせられて居る。土方、建築の手傳も氣が荒い。九州の炭坑夫の如きは、人口割にして、其地方の人口の三倍も犯罪が多いのは、職業の感化である。水夫と火夫とを比較すると、火夫の方が短氣であると云はれて居る。凡て危険な職業に従事して居るものは寛容である。水夫でも、消防夫でも非常に人が善い。放蕩なのは大阪のブラッシュ職工と各地の鑛山人夫。緻密なのはどうしても仕上職工である。音樂手でも、大鼓打とラッパは氣が荒いそうだが、パイ

オリンやセロのひき手は静かな性格を作るであらうと思はれる。別に統計を取つたわけでも無いが、米國のI.W.Wの運動が鋼鐵職工のやつて居ることであり、大正七年夏鳥羽の造船所の職工が、町の物價が高いと云うて町内の店を片端から破壊して行つたなどは、全く職業的性格の感化としか考へられぬ。

労働者は餘程迷信なものであるが、危険な職業に携はるもの程迷信が深い。その理由は心理的に疲労や、衰弱などが、色んなに影響して災厄に導くのを彼等は宗教的に豫知するので、労働者の迷信も效用が無いことはない。機械職工の間にさへ迷信があることを思ふと、近世科學は迷信を破るに何等效能が無いものである。否新しい迷信を多く造る。之は全く心理的に作用するからである。米國の火夫や鑛夫が、日本のそれと同じ様な迷信を持つて居るので、私も人間の心理は同一だと感心したことがある。

日本には昔から、職業上の遺傳があつて、刀鍛冶は代々刀鍛冶であり、彫刻師は代々彫刻師であり、有つた、之は一面から云へばメンデル遺傳法則から來た、優種保存の目的に一致して居ると共に、一種の階級を形成したものである。そして、この階級の善いものになると、幸田露伴の畫く様な偉大な人格例へば『五重塔』の大工十兵衛の様なものも現れたが、穢多階級になれば、その

職業的遺傳の爲めに恐ろしく壓迫せられ僻み根性が出來て、反社會的傾向を帯びる様になつたことは争はれぬ。又凡て放浪性の職業、不定期の職業は反社會的性質を帯びるもので、失業者が就職口を求めて、彷徨して居る時は彼の靈性の危機であり、攝津灘の『百日』は三ヶ月の移住に性格を墮落させる。それで水夫、火夫は性格から云へば危険な職業で、彼等の中で純潔が保ち得るものは餘程豪い。土方も事業を追うて移住するから、純潔を保ち難い。で、定住すると云ふことは、性格を完成さす上に必要な條件である。では、定住することの出来る工場内にはどんな性格が出来るかと云ふに、それは集團的複合人格とでも云ふ可きものが出来る。

工場の人 格

各工場には一々特色ある氣風があることは校風とか、國民精神とか云ふものと少しも違は無い。言語から、動作までが集團的に複合的になつてくる。或工場で、何か甘いことすると必ず『これぢや』と云ふことを云ふ男が有つたが、それから、職工は皆『これぢや』『これぢや』の連發をやる。喧嘩や酒の好きな職工が居ると、その工場は忽ち颯風の中に投せられる。三菱造船所はお役所的氣風がどこから〜までもあるが、川崎造船所は平民主義的である。鈴木播磨造船所

は三菱造船所から職工を引張つたので之またお役所的で鶴見の淺野造船所は川崎から職工が出たので之また平民的であると云ふ評判である。

職工争奪は、職工に前借の癖をつけて、恐ろしく生産界を墮落さす。ブラッシュ職工は明治三十二年頃に職工争奪が有つた時に、荒引職に百圓位貸したのが、今も止まらず、その爲めに職工の放蕩すること實に甚しいものがある。炭坑夫も前借四十圓を許すので前借して廻る悪い坑夫もある。工場の中に一つの癖が出来ると仲々止らぬもので、それは幾十年でもその工場へ社會的に遺傳して行く、鐘紡兵庫支店の或食堂では(あしこには三つ食堂がある)女工が狭いベンチの上に坐つて食事をする癖がついたが、もう幾年となしにその食堂へ来るものは、坐らなければ悪い様に見える。思つて坐つて食事をする。大正七年十二月に五百三十名の職工の縮出しをして有名になつた、神戸荻藻島の橋本造船所には、どう云ふ理由か悪風が職工に傳はつて同所で製造した木造船は初めての航海で沈没したり、試運轉の日に機關に故障が出来たり、數年の中に職工側の悪風の結果と見る可きものが續々現れた。それで同造船所では再度の縮出しで、此種の悪職工を淘汰しやうとしたけれども、充分成功せぬらしい。即ち工場の創立も建國と同じ様なもので、その根本精神が大切である。それで無ければ群衆心理の遺傳的素質が工場と共にいつ迄も残つて、決して取れる

ものではない。

労働心理と新經濟學

私は今迄述べ來つた様な理由で、今日工場經營者の間に流行して居る能率増進なるもの、研究の外に、労働心理なるもの、根本的研究が必要であらうと思ふ。私はずつと前から之に氣がついて居たが、まだ根本的に科學的方式を持つて研究が出来ないのを残念に思つて居る。エール大學の經濟學教授アイヅキング・フキシャ^{アイズキング}氏も略私と同様な意見を一九一七年九月の『米國労働法政雜誌』^{スレシジョン}に述べて居られる、それによると、フキシャ博士の意見では今日流行の所謂能率増進法なるものは、労働者の心理を理解しない頗る非科學的のもので有つて、之に對して新經濟學はどうしても、労働者の心理をよく理解した、工場作業法を編み出さなければならぬのである。即ち、(1)自己保存慾(2)自己發表慾(3)自尊の本能(4)犠牲の本能(5)家庭の本能(6)職業に對する忠實の本能(7)宗教的禮拜の本能等の著しい労働者の心理を中心として工場を經營せねばならぬと云ふのである。

例へば、ロバート・ビー・ウルフ Robert B. Wolf の製紙工場では、労働者の自己發表の本能を利

用して、十年間に能率を二倍して居る。ウルフ氏は初めテラー式能率増進法を以つてやらんとしたが、それは失敗に終つた。それで彼は自己表示の法則を利用して其日一日の製産高を統計的に表示することにした。所が、之が職人の心理に非常に投じて、八年前には一日に百噸のバルブしか製造出来無かつたものが、今日では同数の職工で、二百噸のバルブを製造し得るやうになつた。これに依つて、フキシヤ博士は、新經濟學が顧慮しなければならぬのは誠に此方面であると云うて居る。

これは最近川崎造船所の釘打ちにも表れたことである。初めの程、一日に千二三百しか打て無かつたものが、成績の發表を毎日する様になつてからは、僅か、三週間の間に、四千五百も打つものが出来て來た。これなどは、全く職人心理の中でも、腕自慢と云ふ一つの心理のあるのを上手に利用したので、唯能率増進のみを唱へてこの邊の心理を心得ざるものに取つての善き教訓である。

社會主義者も、労働組合主義者も、能率増進の變手古な心理學に反對して居るのは、全くこの邊の心理的要求から來て居るので有つて、今日の資本家の工場組織では、職工が多少犠牲になつて働いても少しも、人格的賞揚を與へられないものだから、彼等は賃銀だけの労働しかしない様

になるのである。之は賃銀の上に於ても同様で有つて、今日の工場は、人間としての職工に支拂つて居る賃銀では無くして、動力の馬力に對する代價の相場であるから、職工は、心善く労働が出来ない。それで不完全でも、利益分配の方式を取るとか、人格中心の工場經營をして、ヘンリー・フォードが彼の自動車工場をやつて居る様にすると労働者の能率は自然上つてくるのである。で、私は労働者を人間として取扱ひ又教育することが何より肝腎であるのみならず、凡ての産業も人間を生産することが究極の目的であるから、労働者の中に神の姿を刻むことが、政府及資本家のなすべき刻下の最大急務であると云ひたいのである。

貧民窟十年の経験

明治四十二年十二月二十四日に神戸葦合新川の貧民窟に引越して来てから十年になりますから、その間に私の見た貧民性情の變化を報告します。

最初の印象

私はこの文章を、私の日記の回顧として書きませぬ。之は私の研究の回顧であります。また之れからの理想であります。

明治四十二年のクリスマス前の夜に引越して来た時には、貧民窟は空家の多い、それこそ、みすばらしい時代でありました。私も二十一の學生時代でしたが、張りつめた青年の心には、別に何物も驚きませんでした。私の住んで居る近所は皆博徒ばかりで、それには閉口いたしました。それに淫賣婦に、呑だくれとゴロッキ。初めから私はこれ等の人々にいじめられたのでした。その時分は不景氣な時で、蒲團が借れ無いものですから、私の蒲團をのぞんで、宿めてくれと一緒に寝ることを申込む者は二人や三人でありませんでした。また病人の多いこと、それはお話になりませんでした。その前年は、貧民窟とその附近に十人の殺人が有つたのでした。

けれども私の最も感じたのは貫ひ子殺しの多いことでした、貫ひ子殺しは多く景氣不景氣によるものと見えます。不景氣の時には、貧民窟に外から連れて来た子供が非常に増加します。私の第一の驚きは貫ひ子の多いことでした。私は最初の年に、葬式をした十四の死體中、七つ八つ以

上はこの種類のもので有つたと思ひます。それは貧民窟の中部に子供を貰ふ仲介人が有つて、そこへ口入屋あたりから来るものと見えます。そしてその仲介人を経て、次へ次へと貧民窟の内部だけで、四人も五人も手を換へて居ります。それで初めは衣類十枚に金參拾圓で来たとしても、それが第二の手に移る時には金貳拾圓と衣類五枚位になり、第三者の手に移る時には金拾圓と衣類三枚、第四の手に移る時には、金五圓と衣類二枚位いで移るのであります。之と云ふのも現金が欲しいたらで、貧民が、今日でこそ金の五圓、拾圓と云へば餘り珍らしくもありませんが、その當時には、實に大切なものでありまして、金五圓で結婚も離婚も出来たものであります。そのことに就ては別に書きますが、その現金の大切なこと、云へば、私は貧民窟へ這入つて、初めて、金の大切なことに気がつきました。そして金五圓の爲めに……それが欲しい計りに、段々いためられてしまつた貰ひ子を、粥で殺して、營養不良として届出するのですが、私はその種類の中に、最も悲惨なものを見ましたのは、明治四十四年一月二日にその貰ひ子が死んで、私が葬式をして、その後四五日してその家を訪問して見ると、また同じ形の赤ん坊を抱へて居るのです。私は先の赤ん坊が甦つたのでは無いかと驚いた位でした。實際その形があまりよく似て居るからであります。それで尋ねますと、食へ無いから貰ふのだと云ふて居りました。そしてその女は、

現金のある間は家に寝てばかり居るのでした。その女は一月であるのに單衣を着て居りました。勿論蒲團もありませんでした。それで私は衣類と蒲團を與へましたが、すぐ無くして居りました。赤ん坊はその後一ヶ月位は生きて居りましたが、濕疹で顔は全く無くなつて居りました。眼も潰れ、鼻のあたりは老人の様に瘦せ衰へた——それこそ梅干の實の様でした——とうとう二月の始めに死にました

それで私は、今度はどうするであらうかと思つて居りましたが、死んで第一日には誰れも世話する人が無いと見えて、死骸を抱いたまゝ寝て居りました。第二日目に行つても、そのまゝ死骸を抱いて寝て居りました。それで私は、もう見るに見兼ねて、私も金が無かつたが、質に置いて葬式したのでした。私はこの時に、色々な想像が頭に浮んで來ました。然し結局、貰ひ子殺しの心理は、私にはわから無いのでした。たゞもしや幸にして、子供が一歳の時を經過して飯で大きくなる様になれば、それから先はどうでもなると考へるのが一つでありませう。それから乞食に行くにも瘦せ衰へた嬰兒を背負つて行くと、同情が多く集るからでもありませう。乞食の間には、最も露骨に、この嬰兒の貸借があります。私は嬰兒殺しを見る程悲しいことはありませんでした。

『おいたべらう』

それから、最初の印象として私を驚かしたのは、貧民の葬式でした。木賃宿に人が死ぬ。『二疊敷』長屋に人が死ぬ。その場合に、私の家の向隣の通名『たべらう』と呼ばれる男が、大きな茶箱を用意して、死體をその中に入れ、一人で背負つて夕闇の中を荷車につんだり、自分の背に負ひなどして、火葬場に送つて居るのでした。之には私も全く驚いてしまつた。そして貰ひ子殺しの多くの類は、この『たべらう』の手にかゝつて火葬場に送られたものです。貧民の生活の簡單で有る如く、その死も簡單なものでありました。然し私はこれを見て驚いたのは驚いたが、その當時は新聞に書いても反響は無く、どんな手段を取つても輿論が起りませんでした。その當時は随分神戸新聞を通じて市民に訴へたのでしたが、誰れも直接に行動を共にしやうと云ふものもありませんでした。それで最初の年は十四、次の年は十九の葬式をしたことを覚えて居ります。

病人の世話

最初の年は、病人の世話などする氣はありませんでしたが、——金が無いので、或紐育の牧師

の夫人が五百五拾圓を私に送られたので、最初の一年は之でやりました。その當時、私の食費は、一ヶ月五圓位で足りましたから、私は一ヶ月五拾圓で十人、食へ無い人を世話するとに定めて居たのでした。然し来る人も来る人も重病者であるには全く驚きました。私は病人の中に坐つて悲鳴をあげました。多い時には五疊の家を五軒かりて、十六人のものが寝て居りました。そしてその多くは病人でした。然し明治四十四年頃は何を云ふても物價も安かつたので、非常にやりやすいのでした。然し貧民の病人の中に腸結核の多いのには閉口いたしました。私は充分、金も無いし、勉強もしたいし、貧民窟の研究もしたいし、その當時は餘程弱つてしまひました。

賭博

新刑法の當時は餘程善かつたのでしたが、今日ではまたあと返りした様であります。之はたゞ警察権だけでは駄目な様であります。第一家屋の構造、貧民窟の道路の形から改めなければ駄目である様です。博徒と喧嘩はつきもので、私は『ドス』(懐刀)で何度脅迫されたか知れませんが、然し金が無いから大丈夫でした。欲しいものは勝手に取つて行きます。質に入れます。それを私は別にとがめませんでした。

然し博徒と淫賣婦とが、全く同じ系統にあることを知つて驚きました。色々な淫賣婦と直接に親しくなりました。「おひで」と云ふ淫賣婦、貧民窟の女としては美しくいい方でしたが、十三の時から醜業をして、もう男の様な性格を持つて居る女の打明け話を聞きました。私達に向つては優しい優しい氣を持つて居ても、喧嘩をして居る聲などを聲くと、どんな毒婦かと思はれる程であります。

そしてドン底に落ちると、彼等は決して悪人だとは思つて居りません。仕方が無いと云ふて居ります。それで、いくら説教しても、口で説くだけでは駄目であります。金ではとても賄ふことは出来ずまい。贅澤することはよく知つて居るのですが、決して勤勉であることは知ら無いのです。それで女の墮落したものなどは、境遇を全部改めて、胸から湧いて出る愛と親切とを以つてしなければ救へ無いと思ひました。今日でも、私の家の前には、毎晩数人の淫賣婦が出て居りますが、彼等は悪いことをして居るとは考へて居らぬ様であります。「藝者の様な美人になれぬから、こんなつまらぬことをして居るのだ」と云つて、標準は藝者であります。それで何回拘留に處せられても平氣であります。然しその淫賣の亭主が、その女の番人であるには驚きます。そしてその亭主は朝から晩まで賭博をして居るのであります。それで淫賣の間では、犬を飼ふ様な調

子で亭主のことを話して居ります。「妾が食はしてやらなきや、あいつは生きて行かれへんね」と云ふて居る。それで男は全く女の前に頭が上ら無いのである。どこの貧民窟へ行つても、淫賣と博徒は居るが、之は容易に根絶することは出来ない。

然し、私としては博徒や淫賣婦とは實に心易いので、私を知らぬゴロツキが、私を困らせて居ると聞くと、飛んで来て守つてくれるのは彼等である。「弱いものを助けて、強いものをくなくと云ふ宗旨ぢやもの、ウチ等は、その法は守れんけれど、先生をいぢめるのは悪い」と町の辻で説教を防御せられても、防御するものを撃退してくれるのは必ずこの博徒の連中である。(少しも依頼をしないのだが、困つた時には先生に世話になるにきまつて居ると云ふて)。

それで、私の云ふことは、何でも聞いてくれる、たゞ賭博だけは止め無い。私が止めよと云へば、その場限りはやめるが、「遊んで居て立派に食へる商賣でも有れば」と、今度は旦那が標準である。即ち、淫賣の標準は藝者で、博徒の標準は旦那であるのだ。藝者も、旦那も遊んで居て食へる階級である。もし貧民が遊んで反社会的なことをして悪いと云ふのなら、藝者と旦那を先づ罰せねばならぬのである。此處になると、私はいつも、社會の罪惡が今日の産業組合の根底にまで這入つて居ることを思ふので、飽く迄説教をする勇氣を持た無いのである。

人 殺 し

貧民の命程安い生命は無い。初めの年にも多くの人が殺されたが、その後段々少なくなつて、遂に私の米國へ行く年には一人も殺され無かつたが、可哀想に二十錢や三十錢のことで、喧嘩をして人を殺す人もあつた。

その人殺しの有様を、一々書いて居ても程が無い程である。私の宅にも、誤つて人を殺して監獄から出て来た人が二三人も居つたことが有る。彼等は皆臆病もので、私がついて居れば幽霊は出ぬが、私が留守だと幽霊が出て仕方が無かつた。

私は彼等の日常の行爲を見て、人を殺す様なものは、日常は悪人では無くして、全く性格が連續しないものであると云ふことを知り得た。昨年四月に目玉の文と云ふものを殺したSと云ふ男の如きは、俠氣一片の男で有つたが、激昂する癖が有つたので、遂に失敗してしまつた。

貧民の犯罪は、どんな場合にどうなるかと云ふことが殆どわからぬが、殊に人殺しするものは、どんな時にどんな風に殺すかと云ふことがわからぬのである。激昂すると全く性格が分裂してしまつて何が何にやらわからぬのである。貧民窟の子供の激越性は小さい時から拘束すること

無しに捨て、有るので、それこそ手のつけ様の無い程放縱なものである。それが心理的アウトマチックモーション（自動感應運動）で、活動を開始するものであるから、實に厄介である。之は今日の貧民救済が心理的救済をまたなければならぬ點であるが、十年間貧民窟に住んで見て、十の子供が二十になり、五つの子供が十五になり、彼等の多くが相當に犯罪を犯すまで大きくなつて見ると、小さい時からの放縱な子供には、矢張り誘惑が多い様である。それで貧民窟そのものが、殺人養成所の様な氣がしてならない。大正八年一月一日の朝で有つた、近所のものが「人殺し、人殺し」と騒いだので。そして私は半町ばかり西の小野柄橋の傍に行くと、若い青年が一人殺されて居た。之は兄弟（土方の）の喧嘩を仲裁して反つて殺されたので有つた。そんな時に思ふことは、人間と云ふものはつまらぬものであると云ふことである。

近所の交際

近所の交際は凡て女を通じてである。亭主を通じて交際することは實に珍らしい。亭主は親和力が無い。この寄つた猿の様に、怒つた様な顔をして、たゞ身體を横たへる爲めに貧民窟へ歸つてくる。それで酒でも一所に飲めばまた別であらうが、日本では、西洋の様に一緒に飯を食ふと

云ふことが無いから、一寸と親しみがつか無い。然し、女の人とはすぐ親しくなる。女の人はいく家に居るし、心細くて困つて居るから、助けてあげるとよろこんで受ける。それで貧民窟の事業が女手を多く借らねばならぬのである。

凡て、貧民窟の仕事は小さい仕事——心を使つて注意と親切を要する仕事が多いので、大まかにこなしつけ、ことが出来ない。貧民窟小さいことに凡てひがむものは無いから、このひがみを取る爲めに、無理な要求を聞か無い様にすると共に、一寸と引受けたことは直に、小さい約束でも守らねばならぬ。

近所では出産と死亡の際には大抵世話役が有つて、金を集める。十年前には一軒に就いて五錢で有つたものが、今日では拾五錢になつて居るが——それを見ても景氣の善いことがわかる——これは世話ずきのおかみさんが廻つてくれるのである。貧民窟ではこの世話好きのおかみさんがある爲めにどれだけ助けられるかも知れない。この種類のおかみさんは貧民窟では顔、さきの方で、喧嘩の一つ位はやりかね無いこともないが、多くは凄味のある美人である。ゴロツキにも親切であるし、泥棒にも親切であり、金と貧民には親切なのである。たゞ世の中を何とも思つて居らず、少し位の犯罪は手柄の様に考へて居るのが悪いのだが、貧民窟でもしも面白いことがあつた

とすれば、こんな連中を集めて、一晚御馳走して、馬鹿なことを云ふて送るのが一番面白いのである。

中流社會であると、玄關に立つて、『今日は』から始まつて、お辭儀の五六べんもして三十分位い座つてで無ければ雑談も始まら無いが、貧民窟では戸口に立つてもう冗談が云へるのである。それで少しも四角張ら無くて交際が出来る

病氣だと云へば、うさ、い程親切にしてくれる。私は特別であらうが、中流社會に居れば、なかなか世話をしてくれる人などは無いが、貧民窟で病氣になれば幸である。どんな病人でも世話してもらへる。餘程悪い人か、新しい人で無ければ困ることは無い。どんなものでも相互扶助をする。それでドン底の日本人は非常に親切なものであると私は感佩して居るわけである。私が貧民窟で病氣で寝ると乞食して居る様な貧乏人が、バナ、を持ってくる、蜜柑を持ってくる。その人の収入が一日五十錢しか無くとも三十錢位の見舞品を持って來てくれるのである。そんな時には私は涙が流れることが多い。

それで近所と仲善くすると、近所が凡て一家族の様になつてしまふ。もしも堅氣ものばかりであれば貧民窟に居る方が、私に取つてどれだけ仕合せか知れ無い。私は大きな寄宿舎に居るより面

白い。路次を通るおかみさんを寢床の中から呼び止めて、三軒西で、ベストの黴菌の居つた鼠を五錢儲ると思つて妻君が交番へ持つて行つたと云ふので、夫婦喧嘩をして居る様子を聞いたのはつい先達である。外から『先生もうおやすみだつか！』かと聞いてくれる。『おばさん、もうおやすみ！』と床の中へ藻ぐり込む。野趣とも云ふか、貧民窟趣とも云ふか、呑氣なところが私の氣分に合ふのである。貧民窟程仲善くなるころは無い。貧乏すればこそこんなに人間の本性が善くわかるのだと有難くて仕方が無い。それで貧乏して居ても善人で居れる人を求めて、交際すると、生活と云ふものは面白いものである。貧乏程人をひつつけるものは無い。『おばさん、今日はウチ飯焚かずや食はしてくれんか？』と云へば、食ふものが無くても食はしてくれるのが貧民窟の俠氣と云ふものである。貧民窟では之を『氣まへ』と云ふて居るが、貧民窟では、この『氣まへ』一つで動いて行くものである。

然し悪い近所が引越してくると困る。喧嘩をする、賭博をうつ、亂暴をする。實に厄介である。それで、こんな場合には近所が聯合して排斥して居ることが屢々ある。それでも近所が悪い連中ばかりだと、それでその附近が悪化するのである。然し貧民窟で一番いやがられることは、賭博や泥棒の密告を巡査にすることである。之を『犬』と云つたり『ヤエンボウ』と云ふて非常に排

斥する。貧民窟へ這入つたが最後、決して之を他に發表し無い。互に、罪惡を蔽ひ合ふと云ふことが徳義となつて居る。即ち貧民窟は一種の『逃れの町』である。

この逃れの町も、最近景氣が善いので、喧嘩が少くなり、家の中が立派になり、箆筒が這入り、『みづや』が座つて來た。又面白いのは、箆筒や、『みづや』が這入ら無くとも、その家の主人や妻君の性格によつて、家が變つて見えることである。同じ貧民窟の家であり乍ら、一方の家は穢く、一方の家は美しく見えるのは實に面白いことである。これは一つは性癖にもよるが、その人の教養にもよるのである。木村の爺さんと云ふのが二疊敷——一軒の家が二疊しか無い家——に居たが、この木村の爺さんは葬式人夫で有つたが、その家は綺麗に紙を貼りつめて、實に立派なもので有つた。どうして造へたか、正面には芝居の道具立にある様な床の間の畫が貼つて有つたのは私も吃驚してしまつた。最近二疊敷にも景氣が廻つて來て、本年の春から電氣燈がつく様になつたが、その爲めに、皆室を飾り出した。それで同じ隣合せでも雲泥の差がある。兎に角、貧民窟程面白い妙な處は無い。

貧民窟で、私は恰度十年間辻説教をつゞけて居る。その反響が表面から見れば實に僅かであるが、妙な所に響いて居るから面白いのである。『あなたの説教を百幾十回聞いた』と云ふて訪ねてくる青年もあれば、幾十回之れで辻説教を聞いて居ると云ふ女もある。ずつと前は亂暴するものも多く有つたが、今では亂暴するものとは無くなつたのみならず、聞きに来る連中が、之を自分手に防止する。最も面白いのは、破落戸漢の連中が鎮めてくれる。そして決して、その代價を要求はしない。昔ならば、破落戸が何かするときつと金で有つたものだが、今はそうで無い。そして私達の云ふて居ることが、少しづつ、浸み込むと、『先生の云ふ通りしたら、善いんぢやけんどなア、なか／＼出來んわい』と云ふて居る。

然し喧嘩の少なくなつたことは驚く可き程である。之は世界が段々文明になつてくるからであらうか？それとも酒が減つた爲めか？説教がきいて來たのか？私は段々生活の程度が向上しつゝある爲め、その他の種々の原因がその中にあると思ふ。然し淫賣婦は相も變らず繁昌して居る。博奕は毎朝七時頃まで第一回の大きなものが開張される、或者は晩に蠟燭をつけて居る。然し全體から云ふて風紀は少し善くなつた様に思はれる。子供がお辭儀を覺えただけでも大分違ふ。

貧民窟の言語

貧民窟の言葉は一寸と初めて來た人にはわから無い。然し、亂暴な所に愛情のあるものである。初め、私は『小西さん、誰それさん』と呼んで居たが、もうそれをやめた。貧民窟の氣分に合は無いのである。それは愛情が深くなると共に西洋式(?)になるのである。それで姓を呼ばずに、名を呼び、名も敬語をつけずに呼びすてにする。そこに愛情が発生するのだから妙である。『好松！竹松！』と呼んだ方が貧民窟では妙であるのだ。全體に貧民の言葉は簡單である。長い言葉を云ふのは土方稼業のものに限つて居る。土方のものは行狀を知つて居る。仲々八釜敷しいのである。私からみると取つてつけた様であるが、それがなか／＼面白いのである。それで、貧民窟では言葉に色々芝居をしなくてはならぬから困る。或時馬鹿丁寧に改ることもあり、或時には亂暴な言葉が返つて喜ばれるのである。貧民窟によく『江戸ッ兒』と云ふ名がつく。江戸ッ兒辯は一般に貧民窟で喜ばれる。貧民窟で使用する言葉の数は實に少ないものである。それで、少し六ヶ敷しい言葉を使用すると全く通じ無い。それで私は出來るだけ漢語を使はないことにして居る。ところが貧民はそれを使ひたがる。そしてとつてもつか無い所へ漢語を使ふには困つてしま

うのである。之はうかれ節屋に殊に多い。貧民窟のうかれ節屋を聞いて居ると、それを實に面白い、妙な漢語を使用する。

貧民窟の藝人

貧民窟で面白いのは大道藝人の多いことである。豊年屋、東西屋、法界屋、八雲琴の壯士、人形使ひ、うかれ節、浪花節、三味線をながして行く娘等、神樂、獅々舞、手品師、香具師、流行歌を賣る男、猿廻し、セメン賣の樂隊、流行歌入の粟餅賣、それはそれは、貧民には多くの大道藝人が居る。それに餅細工師に、餛飩工師を入れるならば約二十種の藝人が、入れかはりさし變り貧民窟を賑わしてくれるのである。私はこれ等の大道藝術に無量の感慨と趣味を持つて居る。それでどうしても貧民窟を出る勇氣が無い。殊に街の上で三味線を弾いて踊るのは、貧民窟と遊廊とだけで有らうと思ふと、西洋のジブシーの舞踊氣分は貧民窟で無ければ一寸と味ふことは出来ない。

朝早くから神樂藝人が街上で傘の上に褂を廻して居る。晝にはセメン賣の樂隊と、流行歌入の粟餅搗きが、新磯節でやつてくる。餛飩屋がチンチンと鐘を打つて、菅笠の上に人形をくりつけ

て、辻で歌を唱ふ――

『とうさんも 彌さんも 一寸と おいで 深いはなが あるわいな』

と呼んで居る。午後になると、三味線入の踊が街の真中で行はれる。あちの路次からもこちらの路次からも出て来てこれを見るのである。四人五人と豊年屋がくる。地球儀を頭の上にのせてやつてくる『花はヨイ〜』と勢の好いことである。餅細工屋は町の角で大勢の子供大人を集めて居る。貧民窟は朝から晩まで藝人を送り迎へることに急しい。それで貧民窟に少し親みが出来て、こんなことに道樂を覺えると、貧民窟は馬鹿に面白いところである。中流階級であれば一年に一度か二度しか見られぬ藝人の仕事を、私等は窟民窟に居るお蔭で、一日に見てしまふのである。然し貧民窟では古い形の遊藝師が頼つて行く様に見える。之は最近の好景氣に豊年屋になつて出るより工場の方が多く儲るからである。然し之も季節によつて復活するのである。正月には之等凡ての藝人が舊に復歸する。棟上があると、建築手傳の連中が、その神聖視する木遣り歌を唱ひ乍ら貧民窟を廻る。之も貧民生活の一部餘興である。

貧民窟改良家の神經

然し貧民窟に氣長く住んで居つても、美しくも無い長屋に、煤けた子供の顔と、突厥るおかみさんの聲を朝から晩まで聞くと、だんだん柔和な心が無くなる恐れがあるから、そこは注意して自ら外に出て休養してやる必要がある。私はそれを強く感じて居る。

貧民窟の診療に盡して居られる馬島ドクトルの言によると、神戸長田の貧民窟の患者の七割までは神経衰弱にかゝつて居ると云ふことである。然し之は凡ての貧民に就て云ひ得ることである。貧民生活の急迫に會ふたものは大抵神経衰弱にかゝる。それでその人々の間に住んで居る人もいつと無くそれに感染するのである。殊に、脅迫を受けることが度々重なる、神経衰弱にかゝることが多い。それにもう一つの危険は高慢になることである、みな貧乏であるのと、皆無學である爲に、つい／＼高慢になることは、貧民窟改良家の危険である。それで私は貧民窟に住んで貧民生活の根本から改造することが、如何に困難なものであるかを知ると共に、自らが、貧民窟に全く溺れ無い様に努めて居る。

私自身の理想としては、貧民窟の撤去にあるけれども、今直に貧民窟が無くなら無いとすれば、貧しい人々と一緒に面白く慰め合つて行きたいと思ふのである。之は必しも慈善では無い。之は『善き隣人』運動の小さい糸口である。必しも大きな事業では無い。人格と人格との接觸をより多

く増す運動である。で、之は金でも出来ないし、會館でも出来ない。志と眞實とで出来るのである。即ち貧民窟に住むと云ふことそのことだけが、その使命であるのだ。それで私は、過去滿十年間に貧民窟で大きな仕事をしたとは思はぬ、ただ、貧民窟で可愛がられるものとなつたと自覺して喜んで居る。また貧しき人々も、私の處へ來れば、慈善家から受くる親切と違つた、友人として相談が出来ると云ふことをよく知つてくれた。それで凡ての相談を持つて來てくれる。それは記録にもなにも上すことの來ない友人としての相互扶助である。

この後も、私は貧しき人々の愛の中に生きたいと祈つて居る。

人間建築論

社會改造の精神的動機

光明の問題

最初の世界は暗黒であつた。その時に巨人プロメシヤアスが天へ駆け上つて、神の世界から光を盗んで來た。それで、世界は光を滿つる所となつた。然しプロメシヤアスは、彼が光を人間に與へたと云ふ理由によつて、神に罰せられ、コウカサスの山上の巖に結びつけられて、開放を待つて居た。之は希臘神話が我等に教へる處である、世界改造の第一の問題は、光の問題である。人がパンだけで満足して居れるなばら改造の問題は起ら無い。然しパン以上に光が欲しいのである。それで神に反抗してまでも、地上に投げるのである。バラダイスには食物も充分有つた、然しアダムの最初の墮落は、神になりたいと云ふ墮落であつた。つまりアダムの墮落は土の方へ墮落したのである。

古代エヂプトのデモクラシの進行の跡を研究しても私は光の問題を痛切に思ふ。最初、神は光であつた。即ち太陽で有つた。そして王は神であり、太陽であつた。王は光で有つた。ところが、第二、第三と王朝が變ると共に、王の子達が殖えた。そして、王の如く、王の子達も神となつた。そして第十二王朝頃には、神の子孫が頗る殖えて居た。その爲めに、昔は王にのみ許され

た神になる権利が、此頃になつては凡ての人に許さるゝことになつた。そして、死後に於ても平民や奴隷は昇天し得なかつたものが、この頃になると、同人何人も昇天し得る特権が形而上的に與へらるゝことになつた。之は普通に考へるならば何でもない様であるが、神の思想の發達史から云ふたならば、非常な變化で有つて、民衆も王と神により近く接近することを要求した證據である、之が私の云ふ光の問題である。

カーライルは英雄崇拜論を書いて、英雄進化の方向は、神より労働者への進路であることを教へてくれた。茲に私の云ふ労働者崇拜の眞意義があるのである。然し、神より労働者への進路と云ふのは、神を労働者の水準に持つてくると云ふことでは無い、労働者を神に持つて行くと云ふことである。即ちパン爲めに働く労働者が、精神生活を捨てた文化につくと云ふのでは無い、神にならぬが爲めにパンを神聖化すると云ふことである。いやパン問題即ち宗教問題であると云ふことになるのである。即ちパンと人間との實在を共に可能ならしめた宇宙意志が、パンの水準で満足出来なくて、人間の基準に上る努力があると云ふことである。が、マルクスは人間をパンの水準に引き下げんとし、文化を人間抜ききのパンの問題として取扱はんとして居るのである。然し、これは宇宙意志の苦闘の跡を全く無視するので有つて、人がパンのみで満足し、その爲めに奴隷で

満足して居らなければ、パンの問題はそうたいした問題では無い奴隷に生活難は無い。解放せられた人間には生活難がある。それで問題が紛糾してくるのだ。世界の貧民發達史を驗べて見ても之は眞理である。貧民の多く發生した時は、いつでも自由の高調せられた時代である。一八一六年にロシアの農奴が解放された時にも一八六三年北米の黒奴が解放された時にも、國家が消化し得ない程の失業的貧民が現はれた。プロシヤがもし暗黒の中に座つて、神が投げ與へるパンで満足して居るならば最初の社會改造の問題は起ら無かつたのだ。

それで私は云ふ、社會改造の根本問題はパン以上の問題である。それはパン以上の問題であるが故にパンの問題を含んで居るのである。それは光明の問題である。それは新しき人間の建築問題である。

人間藝術と民衆藝術

人間の建築はパンの問題が中心では無く、光明エンライメントの問題が中心であると云ふことを知ると、パン問題は更に深い意義のあるものとなる。即ち最初のパンは生きさんが爲めのパンの問題であるけれども、最後のパンは建築の材料としての問題が発生する。

パンより以上に登り得ない人間であれば——乞食の生活より進み得ないものであれば、社會問題も何にも起るものではない然し、自己の無限の力もて、パンの生産者であるにかゝらずその生産するパンが口に這入らぬから問題になるのである。即ちその問題はパンの問題を通り越した人間の問題である。或人が自由であるに、或人が奴隷であると云ふ不條理の問題である。之は第一の出発点である。そして更に起る問題は、人間は充分食ふた後に猶人間としての藝術生活に生きねばならぬと云ふことである。所が藝術生活のはたきかける世界は物質の世界を離れて何にも無い。ただし、その物質の世界に「生きて居る物質」か「死んで居る物質」かによつて區別があるが、死んで居る物質の藝術では、繪畫や、建築や、彫刻がある。生きて居る藝術では音樂や、舞踊や人體美及日常生活の美化がある。所が今日では死んで居る藝術が重用されて居るが、生きて居る藝術は全く、無視されて居る。たとへば、會話や食事の藝術化は殆ど普通적인なつて居るが、會話や食事の藝術は貧民階級には全く禁せられて居る。金持のみが、上品な言葉を使用し、上品な膳の前に座るが、人々の九割は、日常の生活に藝術の神祕を味ひ得ないものであるから、自己を否定し、天國を憧憬、物質の假象的藝術に隠れんとするのである。私は今日までの凡ての藝術が、この方面に謬つて居ることを痛切に思ふのでかる。

民衆藝術と普通に云はれて居るものに、二種の解釋がある。第一の解釋は、民衆が或特殊な共通な心理的欲求から産れた藝術を楽しみ得ると云ふこと、即ち國民性を中心とした藝術、或は社會主義的色彩を濃厚に持つて居る藝術、その他、勞働階級の根本的藝術的要求から流れ出る、階級的自覺が普通に、民衆藝術と呼ばれたものである。

然し更に、私自身は、この群衆心理を基礎にした藝術の外に第二の民衆藝術を考へるのである。それは、凡ての人間が人間として、根本的に味ひ得る藝術である。即ち人間として、人間を自覺する運動そのものを基礎とすることである。

今日畫家と建築家の藝術は、全人全靈全生の藝術ではあり得ない。それは眼の自覺であり、耳の自覺である、嗅覺の自覺である。それはあまりに部分的である。それで資本主義的物質界には適するが、人間そのものを資本として、その活動と生命のみにしか投資を知らざる、勞働者には何の効用も無い。それでもしも、人間それ自身が藝術となら無ければ、今日の生産者は最も哀れむ可きものである。

之は所謂貴族藝術と云はれて居るものを、破壊して、下等な勞働者のみの藝術にしようとするのでは無いのだ、凡そ人間である以上、人間としての藝術が最も尊重されねばならぬのである。

體美に生きて居る労働者の筋肉美に對する理解を教へられ無い。そして靜止と、凝血と、蒼白と、所有藝術の昔話の死んだ藝術を與へられる。それで日本の藝術家がこんな藝術に飽きが来てそんな藝術しか持つて居ら無い人生がいやになるのは至極尤もなことである。

それで人生を否定せざる爲めに、藝術が入るならば、どうしてもそれは人生藝術を中心とせねばならぬ。そして人生藝術の基底は、生活そのものである。藝術を生活の外に求めることが既に間違つて居るのである。それで、眞の民衆藝術とは生活藝術である。即ち凡そ生きて居るものは、何人と云へども知つて置かねばならぬ、生の肯定の工夫と生の内容の充實の工夫である。

そして之が果して、今日の民衆に許されて居る事實であらうか？ 今日の民衆は食ふにさへ困つて居るではないか、どうして之れで、人間藝術など云ふ暇があるであらうか？ それで資本家は、呪はれたものとして汚れたる顔と、喧囂たる雑音を遁れる爲めに人間性の藝術とか云ふものに逃げるのである。そして、完全なる崇物主義と偶像教が成立するのである。

偶像の成立

偶像の成立は、いつでも人間無視から來るものである。死んだ偶像の殿堂が起きた人間の住宅

又、*（手書き）* 偶像の成立は、いつでも人間無視から來るものである。死んだ偶像の殿堂が起きた人間の住宅

より大きなものである間、偶像主義から目醒めることは出來ないが、客觀の世界に超自然性を求めて行く時に、それはいつでも偶像主義を成立せしむる。

そして偶像主義の眞價はその崇物症的狂亂にある。美の爲めの美、藝術の爲めの藝術、偶像の爲めの偶像の究極はいつまでも此處に陥るのである。また象徴と稱する假面を借りて、生命を死んだ物質で表徴せんとする時に、それはいつでも偶像主義に墮落しないことは無い。

私は必ずしも美の運動を否定するものではない。私は道德の爲めに藝術を犠牲にする勇氣を持た無い。然し美の爲めの美、藝術の爲めの藝術と云ふ分化主義、生命の袋小路を恐れるものである。私は『美の進化』を主張して、人生の目的が美しくならんとする意志にあることも嘗て述べた。（拙著『精神運動と社會運動』參照）然し私は、人生の目的が特定な美だけにあるのでは無くして、全人生活即ち生活そのもの、藝術化にあることを信じたのである。即ち私が美人を見て妻を捨て無いと云ふのは、新らしき女の顔と云ふ特定の美にのみ私が生く可きもので無くして、私の其他の生活の部分、私の子供に對する美しき心、社會に對する美しき心を持ちたいから、その全人生活の美人の爲めに、女の顔を捨てるのである。それを、美は生活そのもの、中にあるのでは無くして、客觀界の、女の顔、畫、寺と云ふ所にあると考へるものだから大きな間違をするの

である。私はこの種類の藝術を捨てる。客観の藝術に生きんとするが故に、資本の集積と、骨董品の賣買と、檢番と遊廓と偶像が出来るのである。

即ち客観藝術の崇物主義が近代資本主義の根底をなして居るものである、カントが認識に於ける、客観性を破壊した如く私も價值評價に於ける、客観主義を破壊する。價值評價の根底は主観の成長にあるのである。即ち偶像は先方にあるのでは無くして、此邊にあるのである。美は畫布の中にあるのでは無くして、眼の中にあるのである。セザンヌと印象派は此處に氣がついたから、畫布の上に一大革命が起つた。即ち今迄の繪はブラシユで布の上に書いたが、新しい繪畫は、眼底神經網の上に、色彩を構成せしめるのである。それで美が漸く動いて來た。即ち人間が成立すると共に線と色彩が進化することになったのである。即ち畫布が生きて來た。それで生きた畫布を大事にすることが、畫布そのものよりも大事なことになったのである。それで、色彩だけで美が成立し無いことがわかつたので、偶像は畫布の上から消滅した。そして、偶像は人間それ自身の懷の中へ隠れることゝなつた。人間が偶像であるのだ。即ち美は生きて居る物質——人間——を離れて決して存在せぬのだ。美の爲めの美、藝術の爲めの藝術と唱へても、一人もし全世界を得るともその生命を失はゞ何の益あらんや』の言の通り、生命即ち藝術、藝術即生命の世界が生れ

無くて、寺と、繪畫と、ピアノが出来上つても、肝心の人間が消滅しては何の役にも立た無くなるのである。即ち眞の藝術は生そのもの、藝術にある筈である。生きた藝術、生きること即ち藝術——之が眞の藝術である。之を私は主観藝術とよぶ。即ち充分人間的な、充分主観的な藝術である、で私は美の主観的効果 (Subjective Effect) を離れて美を論ずることを欲し無い。いくら家が美しくても、人間の顔が穢い中は、私はそれを藝術と云ふことが出来ない。私の藝術は先づ人間自身の根本的改造である。メストフェレスはフウストを伴つて人間を改造して居るワグネルの所へ行つたが、私の考へて居る、眞の藝術は、人間それ自身の改造である。之を離れて、建築をも、畫布をも、彫刻をも——否凡ての客観的固形藝術をも私は否定する。ところが成長することを知ら無い、客観界の袋小路に迷ふた資本主義的崇物症に腐つてしまつた、人間はこれを全く理解せずして、二億圓のセント、ポール寺院と、五億圓のヴェルサイユ宮殿を建て、悦んで居る。

大工イエスが或時四十六年かゝつて建築されたエルサレムにあるヘロデ大王の建てた宮殿を見た時に彼はかう云ふた。『此宮を毀て、我三日にして之を建てん』と。いくら労働者イエスが精力絶倫であつたにしても、如何に彼が建築に通じて居たにしても、ヘロデが一億圓近い金を費して建てた神殿を三日で建てることは出来なかつたのである。然しイエスには一億圓の神殿も藝術的

價値が無かつたのである。彼は振返つて、自らを指した。そして彼自身の生活が即ち藝術であると云ふたのであつた。そこで偶像主義の最後に残つて居たものが破壊された。

今日の美學者の最も多く間違つて居る點はその點である。即ち神殿の爲めに勞働者一人を無視することにある。眞の藝術は勞働者一人の生活そのもの、中にあるのである。一萬の暇人が帝劇や、文樂座に集まり、九千九百九十九萬人が、貧に窶れて居る間、どうしてそれが藝術的だと言へるのだ。彼等は自宅と劇場と寺院だけを藝術的に飾る。そして、一度その外に出ると世は醜惡に充ちて居る。それで彼等は、その醜惡なる世界を見ざらんが爲めに、深く垂れ込めた自働車の引き幕で、自分と世界とを隔離する。此處で、完全に藝術的階級が出来る。そして禮儀と稱する道徳的美術が発生し、その秘訣は自己を禮拜することと、自己が禮拜を強いられることになる。かくして出来上つた藝術的世界の雲の上に住んで見ると、彼自身は知らず知らず、象徴的實在であるかの如く誤信する。そして、自分が勝手に定めた相場で、自分一人を偶像として自らを拜し隣れる多くの他人を壓制するのである。かうして、偶像主義は掠奪と無智と、非藝術の中に、完全に成立するのである。

然し一人しか美的生活を送り得ないと云ふその偶像的藝術的生活がどうして、眞の藝術であり

得やう。殊にその、美の尺度が金であると云ふから、多く集めたものが、最も美術的で、少なく持つて居るものが非美術的である。と云ふのであるから、我等は實際それに堪え得ることが出来るであらうか？ 私はそんな安價な、藝術を否定する。私は藝術を人間の方へ取り戻す即ち所謂ペトロン付きの貴族藝術——一名金貨藝術を笑ふ。私は偶像の爲めに建てる建築を笑ふ。私は凡ての枯死せる物質藝術を笑ふのである。眞の藝術は常に生きて居らねばならぬ。それは飯を食ふものである。

最も美術的な飯を食ふもの

飯を食ふものが最も美術的であるのだ。實在の驚異は人間そのものである。哲學史の最初に宇宙の本體が木火土金の四元で成立して居る様に考へたこともあつたが、藝術生活に於て、人間はまだ、自己が實在の驚異であることを知らずして、人形と家と、畫布に刺激を求めて行く、實在の驚異は人間である。世界で人間程美しいものは無いのだ。花よりも太陽よりも、若きダビデの顔と、ダアイアナの顔は美しかつたのだ。然し人間は肉體美を捨て、表象の爲めに衣類を纏ふた。そして衣類は表象の推移によつて遂に財産の問題となつた。財産はダビデの顔の榮と、ダア

イアナの美を奪つてしまつた。私は貧民窟に長く住んで居て、最も美しく感じるのは嬰兒の皮膚とその人體美である。貧民窟の外の凡てが穢きたなくても、神が嬰兒を美しく作つたことは美しいことで有つた。美しく作らなければ、何人が赤ん坊を可愛がる事が出来やうぞ？ 貧民窟の藝術で最も美しい創作は、私は嬰兒の出産であると考へて居る。それで神の創作の中で一番美しいものは、人間である。然し、人間は誤れる方向を取つて居る爲めに、この美しかる可き嬰兒の顔の秀でて居ることと、労働者の筋肉美の輝きを段々奪つて行く。安價な賃銀と長時間の労働は彼等をして絶望せしめる。彼等も遂には眞の藝術觀を捨て、有産階級が捏造した唯物美術に心を傾ける様になるのである。

然し唯物美術が永遠に成功せざるものであることを私は此處に確證せねばならぬ。人間の主觀性の呪ひ、否、その蔭は何處の何處までもつき伴ふて、唯物藝術が破産するまで之を動搖せしめ得るのである。この法則を我等に最も強く教へてくれたのは、ジョン・ラスキン John Ruskin である。殊に彼の二名著 “Seven Lamps on Architecture” (建築の七つの燈) と “The Stones of Venice” (ヴェニスの石) はラスキンの文明批評家としての地位を永久的なものにならしめたのみならず、又他面に於ては、藝術批判に新紀元を開いたものである。

『建築の七つの燈』に於てラスキンは(1)眞理(2)美(3)力(4)犠牲(5)従順(6)労働(7)記憶 Truth, Beauty, Power, Sacrifice, Obedience, Labour, Memory の七つの精神的作用が、建築の凡てに現はれて居るものであると詳しく論じて居るのである。勿論ラスキンは、後になつて、この著は成功して居らぬと云ふて居るけれども、彼は建築を見るに人間性を採用したことは一大発見で有つたのだ。

ところが、更に『ヴェニスの石』になつて文明批評家は全く驚いてしまつたので有つた。彼はヴェニスの建築史上に現れた一つ一つの石の出處から由來を凡て研究し、文字通りに『石』を研究したので有つた。彼はヴェニスの建築史を二期に分ち、第一期ビザンチン Byzantine Period 第二期ゴシック期 Gothic Period 第三期レネサンス期 Renaissance Period とし更に第三期レネサンスを三分して初期レネサンスと、ローマレネサンスと、變體レネサンスの時代に細分し、時代思想と建築が全く相平行するものであることを編述して居るのである。即ちラスキンは、ヴェニスの市民生活が墮落すると共に、成金の藝術が跋扈し、遂に救済す可らざるものになつたと云ふて居るのである。ラスキンは各所に論じて居るが、たゞ金を消費する爲めと、贅澤と裝飾の爲めの裝飾主義が重せられる様になつて建築が全く墮落したと云ふて居る。ラスキンは云ふて居る。

【この汚あか抜けしたこと、完成はそれ自身の危険性を持つて居た、そして近代伊太利の歴史は先

づ、快樂に、それから腐敗に沈溺することゝなつたから、たとひ彼女が再び純粹なラテン語を讀み書きが出来る様になつても運命は一つで有つたらうと思はれる。……形式に與へた、時代の影響はレネサンス期を支配する悪い原理の僅かな部分である。その根本的誤謬は、私が既に述べた通りに、その初期に於てどれだけ金がかつても、完成したいと云ふ大まかな要求に有つたのだ。……私がゴシックの性質に就て述べた通りに普通の労働者からは完成を要求することは出来ない——それは建築家の全生涯と、全思想と全精力をかけて初めて得られるものである。そしてレネサンス期の歐洲は手數のかゝる完成の爲めには、之も僅かな代價だと考へたのである。ヴェロチオ Nerocchio Ghiberti の様な人は、いつも、どこにでも居るわけ無いから、彼等だけ普通の労働者がやる様に要求することは、彼等の模倣するに限ると考へて、發明と熱情を捨て、形式と技巧の完成を眞似たが、それと共に彼等は、その靈魂を失つてしまつた」(Ruskin: The stones of Venice Vol. III, P. 14—15) ラスキンは金ピカのレネサンス、色彩の濃度が益々深くなるレサネンスを見て、之を成金藝術だとしその藝術的の衰退史を道徳的に審美的に文明批評史的に我等に教へたのである。その批評された推移期間は實に一一八〇年代より一四一八年に三世紀に渡つて居るが、ラスキンは、その間に公私の生活が如何に建築の様式に影響して居るか

云ふことを論じて居るが、彼の考へでは、宗教と、正義と、秩序が、凡ての根で有つて、藝術はたゞ、その花にしか過ぎ無いと云ふので有つた。

勿論彼は晩年になつた、彼自らの「ヴェニス」の石に書いた建築の宗教的批判を多少誤つた所があるとして居るが、(Frederick Harrison: John Ruskin, P. 72 参照) 彼が『近世畫家』より『ヴェニスの石』『シセム、エンド、リトリリス』その他、彼の文明批評的書物を論じて流れる命脈には、カーライルが『衣裳哲學』に書いたことと同じ思想が流れて居るので有つて、それは、靈魂の動く方向に、凡ての藝術が動くものであると云ふことを明示して居るものである。たゞカーライルが、ヘーゲル的であるに反して、ラスキンが心理的であることは見脱す可らざる、彼の特長で有つて、彼の解釋は間違つて居らぬと私は思ふのである。

人間の建築

即ち私は、凡ての藝術は靈の呻きであるとしたのである。靈と云へば、或人は反對するであらう。之を生きた物質とすることに私は少しも反對しない。生きて居るならばそれで善いのである。マルクスは、動く物質として、唯物史觀——實は唯流動物質史觀を書いたが——私は、生き

て居る物質それは、生え上り、呻き、成長する意志の運動が凡て、藝術であることを主張するのである。

即ち、私はマルクスの生産と云ふことを全く藝術的衝動として、解釋したのである。それは、電流の様なトランスミッションでは無くして、ベルグソンが云ふ様な、創造衝動から湧き出づる靈——生きた意志の衝動であるのだ。それが、客觀の條件即ち物質の形式を借りて、生産と創作の方向に移るものであるのだ。

だから、生そのものから云へば、生命も物質も渾一的なものであるのだ、凡てがローゴス Logos ABC であるのだ。花にも葉にも、進化史上の意義ある如く、凡ての建築の様式——羅馬希臘の柱、羅馬の圓塔、エジプトのピラミッド、アラビアの百合葉形の塔、バビロンの直角建築、印度の尖塔、支那の瓦屋根日本の唐破風、ゴシックの窓とそのステابل——之等は見ただけで、その國民性と、思想を現して居るものである。

それであるからもしも建築と云ふものが石と鐵と木と土で出来ると思へば非常な間違ひである。建築の礎は人間性の建築である。それで賢い建築技師は、家を建てる前に人を建てた。然し近代の社會政策家は、人を建てる前に家を建てよと云ふのである。

境遇の感化が偉大なものであることは、何人もよく知つて居る。今日の貧民窟の嬰兒死亡率の高いのも、群衆生活の罪であることもわかつて居る。それで唯物社會主義者も、私も住宅問題を八釜敷云ふのである。然し唯物社會主義者はそこに止るのである。彼等は物質の缺乏が、今日の罪を産んだのだと云ふのである。然し私から云へば、人間が人間を大事にせずして、物質を集積し、尊き隣人——生産者——最も尊き藝術品を愛することをし無いものだから、こんなになつたと云ひたいのであるつまり物質の缺乏が第一の問題では無くして、人生藝術の標準が第一義の問題であるのだ。

金を多く儲けて何をやる？ 家を買ふ、家を買ふて何をやる美人を買ふ。美人は何處から来る？ 貧民窟から来る。然し貧民窟もパンと住宅の爲めに美人が缺乏する様になると、成金も結局は貧民を藝者屋に移して、パンと住宅と衣服を支給して、今度は物質そのもの、爲めでは無くして、人間性を手なづけ、爲めに、物質を豊かにするのである。美術も金儲けも結局は人間から出て、人間の處へ歸つてくるのである。人間には矢張り人間が一番面白いのである。それで唯物社會主義を叫ぶのも人間の爲めである。パンの不足を訴へるのも人間の爲めである。それをマルキシズムがパンが充分食へるならば、人間が出来上る様に云ふのは間違つて居る。パンは數ある

中の一個の條件である。條件で人間は出来ない。人間は煉瓦造の家とは違ふ。煉瓦石を積む様にパンを積んでも人間は出来ぬ。それで我等が唯物社會主義に目醒める前に我等は、人間性の偉大を充分知る必要があるのである。即ち、パンの計量は人間性の爆發の運動に於て運動のABCである。まだまだもつと大きな問題があるのだ。

マルクスは生産の形式が文化の基礎だと云ふたが、生産の形式が——そんな特殊な部分的なものが基礎であり得る筈が無いそれは文化の形式の基礎で有つて、文化の本體の基礎では無い本體は矢張り人間である。人間が經濟組織を編み出すので、その生産の形式が、伽嘶の不思議國のアリスの様に、自分の眼から出た涙の爲めに漂流して居ると云ふのがマルクスの説き方であるが、アリスが自らを救ふ工夫を知つて居た如く、人間の編み出した生産の形式は、また人間が變更し得るのである。それで社會改造の根本動機は人間の爲めの人間の運動であらねばならぬのだ。

境遇と陶法をあまりに重ずることは十九世紀後半の社會科學の通弊で有つた。之はダアウキから來た、悪い癖で有つた。然し二十世紀では生物學的に又數學的にメンデルズムが證據立てられたから境遇より、本質的遺傳が、進化の爲めには大切なものであると云ふことがわかつたのである。之は社會改造學に於ても同様なことが云へる。マルクス流の社會境遇學(Social Echology)

から出發しても、人間改造の本領にはまだ遠い。それはどうしてもメンデルズチックに人間の本質から出發せねばならぬ。進化の道程を歩む段になり、優種を得る點になるとマルクス學派は結局ダアウキニズム同様失敗である。之はカール、ビヤソンや、ド、グリズが證據立て、くれる。境遇陶法は本質陶法に比較して勢力が無いとは云へぬが、非常に弱いものである。つまり境遇陶法は不自然なものである。即ち私は今日の資本主義的社會境遇が不自然なものであると思ふと共に、マルキシズム的社會境遇を非常に不自然なものであると思ふのである。それで私は人間性の本質が充分爆發し得る程度に於ての社會境遇を要求するのである。

カーライルはサトラス、レザルタスに於て、衣装と云ふものも要するに一個の思想であると云ふことを教へてくれたが、私はそう信じたい。私はパンの生活も一個の表象であることを信じたのである。表象と云へば、何だか眞實性を缺く様に響くが、生の延び上る方向と形式の指示表だと信じる場合に、私は必しも之が眞實性を缺くものでは無いと思ふのである。物質は要するに、生命の衣装である。パンも建築も衣服も、生命の表象である。表象なくして、生命には意義が無いから、生命は常に肉の衣をつけて居るのである。パンも一個の衣飾である。

パンが一個の衣飾であることを、了解した時に、我等は、その偉大なる人間性の爲めに藝術品

としてのパンを要求する権利を持つ。即ち乞食としてパンを要求するのでは無くして、人間としてパンを要求するのである。であるから生産者が資本家にパンを要求するのは、彼の従者であるからでは無い。自らに属するものを○○○○○だけのことである。で、労働者がパンの運動をすることを笑つてはならない。それは○○○○○のABCであるのだ。○○はそれから始まるのだ。

人間の生産

パン生活も要するに、人間建築の一部分にしか過ぎ無いことを私は物語つた。人間建築は、凡ての衣装にして眞直に上に延び上るのである。

物質は衣飾である。それはまた人間性の本體では無い。それで、人間建築の第二の階級に移るのである。それは、人間の生産である。

人間の藝術で最も面白いのは、人間それ自身である。人間の創作の中での傑作は、人間の子の製作である。「我」の完成した後に「汝」を産むことは、完成した藝術である。我がも一つの我を分裂させたものを「汝」と言ふ。そして、第一の我を愛し、育み、尊敬する如く、第二の我を、愛し、育み尊敬することによつて、社會と云ふものが發生する。それで、社會と云ふものは、我が「汝」

を分裂させて後に産れるのである。社會はテカルトの「我」でも、カントの「我」でもない。カントの「我」の表象で、産れかゝつて居たか、まだ産れ無かつた。そして今日もまだ、「汝」が充分産れて居らないから、社會は産れて居るとも云へぬ。然し、汝の誕生の準備として、「愛」は既にイエスによりトルストイによりクロバトキンによつて長く説かれて居る。

それで、社會主義の誕生は、この愛と「汝」の誕生の上に置かる可きもので有つて、パンとその生産の形式の上に据えらる可きものでは無い。社會——主義とは、「汝」——主義或は「愛」——主義と云ふことである。愛と相互扶助の無い世界に社會主義があり得ない。それで、「汝」が充分解化し無い日本の國に、そこには、「我」と「金力」と「我の奴隸」のみが支配するで「汝」主義が歓迎せられる筈が無い。

然し間違つてくれれば困る。ニイチエは「汝」主義を「我」を「汝」に服従することだと考へて、第一期に、之を説いた労働者イエスの道徳を奴隸道徳だと云ふたが、私は「汝」主義の道徳に於て、奴隸道徳を唱道するのでは無い。「我」の誕生し無いものに「汝」の誕生する道理が無い。オイケンが云ふた通り、敵をも愛し得ると云ふことは、自分が餘程豪いからであると云ふて居るが、我が誕生した後に、汝の偉いことが始めてわかるのである。宗教上に於ても「我」の生活から、「神」の

生活に移ることを、生の更改と云ふて居るが、私は此場合、『神』の變りに『汝』を借りやう『我』より『汝』に移るのは一つの世界の創造を意味して居る。即ち之は神の力を以つて、無ければ不可能なことである。即ち最も強大なる持主、たとへば母の如きで初めて、『汝』を愛し、『汝』を産むことが出来るのである。之は生の更改である。それで社會主義の時代は、愛と尊敬の時代を意味して居る。何人も他人を略奪せず、何人も他人を侮辱し無い時代を豫想して居る。それでこの時代は生産者だけの時代ではない。生産者は、他の藝術品としての人間を産む——その中に自分の子も他人の子も、自分の妻も他人の妻も這入つて居る。そして自分の子の教育者も、科學研究者も、各種の藝術家——消費者も這入つて居る。即ち、生産者は、汝を産むと同時に、藝術としての人間——消費者階級そのものまでも許容し、之に尊敬を拂ふことになるのである。そして消費者階級も生産者の爲めに消費するのであるから、生産者に不利益になる様な消費はしない。愛は此處に成立するのである。妻は人形では無い。然し彼女は彼に取つて一個の藝術品で無きことは無い。即ち彼はその生きた藝術品に愛を注ぐ。そうするとその生きた人形は愛の中に人間として復活する。彼女は生産者である夫より、生活費を要求する権利を持つて居る。彼女は一個の藝術家である。人間の創作をする。(その人間創作はも一つの不生産者を臨時殖すことになる。)この理屈と

同じく、生産者は消費者に分化し、その分化したものに威張つて貰ふのが、『汝』の誕生の意義である。眞の社會主義はこの『愛』の源に湧くものである。

人間建築の内容

『汝』と『愛』とが人間建築の最後の階段でありとすれば、男女間の愛と敵手に對する愛民族間の愛罪人に對する愛とが問題になる。男女間の愛はマルキシズムに云ふ如くたゞ財産の問題だけを取り除いてしまつても猶問題が残つて居る。之は自由に愛し得る時代になつて猶一層問題が大きくなるのである。之は社會改造の鍵である。たゞ物質の改造をしても人間がよくならなければ駄目である。その爲めには人種改良が必要である。そして人種改良の基礎は、男女間の愛の問題である。然しベルトランド、ラッセルなどが考へるやうに、男女問題は遂に宗教問題である。宇宙意志の飛躍の方向を知らずして、たゞ美人のみをより、わけて行くことは無意味なことである。

然し、更に苦痛を感ずることは、競争者に對する覺悟である自己のみを中心として、それに反對するものを拒み、ポルセヴキズムの様に、その主義に賛成せざるものを凡て殺して居れば愛と汝の産れることは無い。それで『社會』を産む爲めには、符合によれる専制を全廢する必要がある。

或は何主義或は何黨と、凡ての人間性を離れて、符合と表象によつて、人間性を滅却しようこととは許され無い。私はこれ等の凡ての虚偽を排斥する。昔は、宗教の名によつて、殺し合ひをしたものである。新教と舊教の戦争は三十年續いた、マホメット教とキリスト教、キリスト教と佛教——宗教に於ては符合と表象の名の下に嘗て専制の無かつたことが無い。私はこの種類の符合政治と表象宗教を破棄したい。私達は先づ人間として相愛したい。私等は偶像の統治を避忌する。私は人間としての凡てのものを、人間の相場で愛したい。佛教や基督教の名をつけて、憎み合ふことを教へる凡ての手段と方法に私は反対する。イエスは「善きサマリア人」の喩を以つて時代の人にこれを説いた。愛は符合を超越して居る。

更に國境の問題である。私は人間の迷妄が餘りに強い爲めに國境が地球の表面にほんとに引かれて居るものだと考へて居ることを憐む。私は國境を越えて愛したい。それは人間性の回復と、汝の誕生の爲めである。それで私は軍隊主義と凡ての武装に反対する。

然し更に深い處に人間性の改造がある。それは、犯罪者に對する態度である。今日の監獄と裁判制度は人間に對する取扱をする爲めに出来たものでは無い。それは驕慢と耻辱の巢である。人間社會にそんなものがあることすら、目醒めたるものには苦痛である。米國シンシン監獄

の典獄トーマス、オスボルン氏は(Thomas Osborn)一九一五年頃囚人に監獄の自治を與へて、凡ての囚人に獄内の自由を與へた。その爲めに囚人がベリス、ボールの遊技をすることが出来る様になつた。之が紐育州の大問題となつて、オスボルン氏は非常に批難されたことが有たが、然し、最後はオスボルン氏の勝利で有つた。オスボルン氏は先天性犯人種なるものを信じ無いのである。彼は囚人を病理的に取扱ふ爲めに、先づ囚人の自治的精神を養成せねばならぬと云ふ理由で自治體を組織させたのである。オスボルン氏自らの獄中生活の研究の結果、今日の様な監獄生活は人間を獸類として取扱ふものであるから、人間として、よくなることは無い。それで、空氣と光線と遊技を與へねばならぬと云ふ彼の精神的病理研究から、根本的に彼は監獄を改良した。その爲めに、さしも多かつた、紐育市の再犯者も、その改良案の採用と共に、直に減少してしまつた。その前は出獄者が一年の中に七割位まで再犯者として歸つて來て居たものが、この囚人自治制と共に二割何分に減少してしまつたのである。それで効果の上から見ると、オスボルンに反対するとは何人も出来なかつたのである。

罪人に對する愛……罪人に對してまでも愛を注ぎ得る社會になつて始めて、人間性の確立が出来るのである。然し之はバン問題だけで凡てを解決せんとする唯物社會主義に取つては餘りにデ

リケートな問題である。此處へ來ると大工イエスの取つた行き方「わが來りしは罪ある人を招きて悔改めしめんが爲めなり」と云ふ大膽な態度は、あまり宗教的であるから、普通の人は近づき難いが、結局は凡ての改造運動はそこへ落付く可きものであるのだ。つまり罪人までが悔改に導かれる爲めに愛せられ、育まれて初めて完全な社會と云ふものが出來上るのである。その時には、法廷も、死刑も、巡查も刑事も無用になるのである。今日これ等の人はどれだけ人間性を没却して居ることであらう。人を疑はねばならぬ様に造られた、檢事と刑事の爲めに私は悲しむ。人間の悲しみの中に、人間を疑はねばならぬと云ふ役程辛いものは無いのだ。

人間殿堂の讚美

大きな太陽が昇る。人間の回復とその隆起は、何人も妨げることが出來ない。之は世界の建築の中で、最も壯嚴なものである。獨逸の學者は細胞の模形から造つて居れば、人體だけでも二億圓の價値があると云ふ。どんな人でも、二億の持主で有るのだ。どんな貧乏な勞働者でも、二億圓の自動宮殿を毎日運んで居るのだ。その自動宮殿に色々な額がかゝる——或は科學、或は宗教、或は藝術、之れみな一個の裝飾品である。然しその實際に於ては、人間殿堂程偉大な藝術品

は無いのである。

然し、今日の資本と工場は、この絶大なる藝術品を油壺の隣に据えて、機械の間に缺んで、軌るのである。今日の時代の工場こそ魔物である。

然し光明が工場の窓から、漏れてくる。工場は神の子で一ぱいになつて居ることが氣附かれてくる。そして、自由と光明の爲めに、機械よりも、この光明の子等の姿が拜まれる時代が来る。そしてあれ、今、太陽が昇る、人間建築は今や完成に近いのである。

大正九年四月十五日印刷
大正九年四月十八日發行

定價參圓五拾錢

著者 賀川 豐彦

發行者 福永文之助
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

印刷者 波邊為藏
東京市京橋區日吉町十番地

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地

警 醒 社 書 店

振替口座東京五五三番

行發店書永福

著者郎三岩野沖

版四

富本憲吉裝畫
伊上凡骨彫刻
□ □ 四六判五百頁
天金布裝箱入

宿

命

定價貳圓五拾錢
送料書留貳拾壹錢

大坂朝日懸賞當選小説

文壇近時の一大彗星として著者が忽然その出現を爲したのは實に「大坂朝日」に於ける此「宿命」の發表によつてである。併し氣象の險惡は此彗星の赫灼たる長尾を或は切斷し或は隱蔽した。そして種々なる變形化成を遂げた後、初めて茲に其の全體の再出現を爲すに至つた。嗚呼大彗星！其の八方に放射する光線に於ては強烈なる白光の中に著者の至醇なる戀愛觀と幽玄なる社會觀とを看取せよ。殊に錯雜せる奇怪なる事件を隱約の間に髣髴させた所に無限の精趣と感慨と昂奮との溢るるを看取せよ。

版四

煉瓦の雨

短篇小説

富本憲吉裝畫
定價壹圓六拾錢
送料拾錢

東京市京橋區尾張町二丁目

電話銀座一六九九
振替東京四〇四六六

福永書店

45
630

終

